ひ、一目づゝ間隔を飛ばして、同じく織絲と織絲との間の凹んだ所へ繡絲を渡して行くのを「目飛ばし」と申して居ります。「目拾ひ」の方は布目一筋づゝの間毎に渡して行くのですから、布目一筋(即ち織絲一目)づゝが其の繡絲の間に隙いて見える事になり、「目飛ばし」の方は一目飛ばしますから、繡絲と繡絲との間が「目拾ひ」より倍隙いて見える事になります。此の「目拾ひ」と「目飛ばし」は其の目的に依つて何れかを選ぶのでありまして、又景色畫などを菅繡にて現はす場合に量しのやうに繡を段々にまばらに致す事がありますが、斯う云ふ場合には順に「二目飛し」「三目飛し」と云ふ風に間を飛ばして行く事もあります。

それから五の目綴と云ふのは前の圖の乙丙丁に示せる如く。寨の目の五ッを五の目と稱して居りますが、恰度此の五の目(同圖の丙)のやうに、例へば最初の絲列を一分おきに綴ぢるとすれば、次の絲列も同じく一分おきにして前の綴目の中間々々を綴ぢて行き、其の次の絲列も同じく一分おきにして前の綴目の中間(此の場合は最初の綴目と同じ列の位置)々々を綴ぢて行くと云ふ風に之を繰返して行く綴ぢ方を申すのであります。斯くすると其の綴目は丁に示せる如く五の目の連續したものとなるので、之を五の目綴と稱して居るのであります。此の五の目綴は又煉瓦を積んだ目のやうになつて居る所から、歐米では「ブリック、コーチング」即ち煉瓦綴と申して居ります。

而して此の五の目綴の寸法はものに依りて違ひますが、緻密なものであれば三厘から五厘位の間隔にて綴ぢ、粗きものは一分位の間隔に致します。

それから菅繡に用ゐる絲は、繡絲の方は、布地の厚薄(即ち織絲の太細)に依り、又其の繡ふべき圖柄に應じて其の太細を定めるのでありますが、先づ普通は二菅合せの縒の強いものを用ゐます。又綴絲(止絲とも稱する)の方は一菅合せの細い縒絲を用ゐるのが普通であります。

而して菅繡の絲の渡し方は最初にも說ける如く一針にて横一文字に繡ひ渡して行けばよろしいのでありまして、其の順序は圖柄に依りて多少の相違はありますが、普通では、下の方から繡ひ初める事に致し、一筋づゝの針の通し方は、右端の方に下から針を出し、左端の方に上から針を刺すのであります。

又綴の仕方は股げて止める所謂「表綴」の方法にて致し、其の順序は下の方から

初るやうになし、一筋に於ける順序は初めは左の方から綴ぢ進んで行き、次には右の方から、其の次は左と交互に綴ぢ進んで行くのであります。

猶ほ此の綴は「隱綴」に致す場合もあります。隱綴と言ふのは綴目が見えぬやうに、綴絲を繡絲の太さの中央に貫いて止める方法でありまして、表綴は繡絲の上に股げて止めるのでありますが、之は繡絲の太さの中央を貫いて止めると言ふだけの違ひであります。

それから又綴目も普通は五の目でありますが、品に依つては五の目を殊更に少し崩して、亂綴にする場合もあります。之は五の目では餘りに規則正しく定まり過ぎると言ふので、それを不規則に崩して、一種の趣きを出さうと言ふのであります。五の目綴にするか亂綴にするかは其の場合と其の人の好みに依りて適當に選ぶのがよろしいのであります。

それで菅繡は前に、述べた如く、縒を強くした細い縒絲を用ゐるのが普通でありますが、又偶には釜絲にて菅繡をする場合もあります、此の場合の綴は、縒絲の場合の如く五の目綴にするのではなくして、霧押へと云ふ方法にて、繡絲を止めて行くのであります。但し此の場合の霧押は平繡斜繡などの場合の霧押への仕方と違ひ、繡絲一筋づゝを浮かぬやうに押へて行くのであります。

菅繡は繡紋、景色書、模様式の繡方等に應用せられ、比較的に多く用ゐらるゝ繡方でありまして、品の良い雅致に富んだものであります。

卅二、疋田繡

此の繡方は菅繡にて疋田絞のやうに繡ふ仕方でありまして、例へば上圖の繡ひ方圖に示せる如く蛇の目形や菱蛇の目形などを菅繡の方法にて繡ひ並べて、恰度疋田絞のやうに現はして行くのであります。

疋田の繡圖

此の疋田繡は以上の如く菅繡にて繡ひ現はして行くのが普通でありますが、又釜絲や縒絲にて平繡にして現はして行く場合もあります。之等は其の現はさんとする疋田絞の工合に應じて適當に選ぶ事が必要であります。

而して菅繡の方法にて繡ひ現はす場合には絲渡りの長い部分には綴ぢをす

る事勿論でありますが、極く短い部分には綴ぢをする必要はありません。例へば絲渡りが五厘とか一分とか云ふやうな極く短いものには綴ぢを致さなくてよろしいのであります。又絲渡りが長くても一分位のものでありましたら、全體に綴を爲なくてもよろしく又綴を隱し綴にしてもよろしいのであります。

卅三、大島繡

大島繡と言ふのは菅繡にて大島絣のやうに繡つて行く方法を申すのでありまして、例へば上圖に示せる如く模様の兩側に於て殊更に針目を不揃ひになし、配色なども大島絣風の茶がゝりし色即ち黒つぽい茶と淡い茶色との縒混せの絲を繡絲となし、布地を茶色にすると云ふ如き工合にして何處までも大島絣風に繡ひ現はして行く方法を申すのであります。從つて模様は大島絣風のものを選んで致す事が適當でありますが、強がち然う云ふものばかりでなくいろ〳〵の模様に應用してよろしいのであります。

大島繡の圖

綴は絲の渡りが長い場合には致す必要がありますが、短い場合には致さなくてよろしい事疋田繡の場合と同様であります。

猶ほ此の大島繡は大島絣風に繡ふばかりでなく、洋風の更紗模様例へば薔薇の模様などを其の色彩通りの色絲にて大島繡の式に繡ふと又一層面白いものになると思ひます。

卅四、織繡

織繡は恰も織地のやうに繡ひ現はすのを以て此の名があるのでありまして、例へば衣服の定紋などを繡ひ現はす場合などには、横列の絲を白絲にて繡ひ、綴絲を衣服の布地と同じ色の絲(又はそれより少し濃き色の絲)に致すが如き繡方を申すのであります、

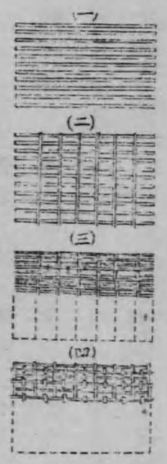
而して其の仕方は全く菅繡と同一でありまして、只菅繡は横絲列の間が簾のやうに隙いて居りますが、之は隙間なく並べて行き、而して綴目も菅繡よりは倍ほど細かく致すだけの相違であります。即ち菅繡の綴目は普通五厘間隔の五の目綴でありますが、織繡の方は其の半分の二厘五毛間隔の五の目綴に致すのであります。尤も此の綴目の間隔は繡ふべき形狀等の相違に依りて多少の粗

密を加減すべきは勿論の事であります。尙ほ菅繍は布地の布目に從つて横列に繍ふのに限りますけれども、織繍は所要に應じて例へば人物の衣類等を現はす場合に、其の衣服の布目が曲つて居れば其の樣に方向を違へて繍ふ事もあります。應用としては繍紋、人物の衣服地などを現はす場合に用ゐます。

卅五、 莚繍（織繍の變體）

莚繍は藁の莚織のやうに繍ふところから此の名稱があるのでありまして、結果は織繍と同樣であります。即ち先づ織繍よりも一目づゝ間隔を飛ばして横列を繍ふ事上の圖の(一)の如く致し、次に細き絹絲にて其の横列の繍の上へ縦に一針の渡しで織繍の綴の間隔と同じ間隔にて繍ひ渡す事同圖の(二)に示せる如く致し、其の次に一目づゝ置いた横列の間々へ、又横列の繍を上から冠せて繍つて行く事同圖の(三)に示せる如く致し、最後に今渡した横列の絲を縦列の間々にて一筋づゝ縦列の絲と同じ細き絹絲にて綴ぢ附けて行くのでありま

莚繍の圖



す。

斯くすれば結果は織繍と同じで、手數は此の方が省けて德用です。之れも織繍と同樣に繍紋などに多く應用されます。右の圖は解り易くする爲めに横列の絲が隙いて居りますが、實際は隙かぬやうに繍ふ事は勿論であります。

卅六、 金銀絲繍の種類

金銀絲繍にはいろ〳〵種類がありまして、金銀絲を以て繍ふから此の名があるのでありまして、卽ち金絲繍は金絲を以て繍つて行くものでありまして、極く細い毛金とか一掛又は一掛半などの金絲は針に通して普通の繍のやうに繍地に刺して行きますが、太いものになりますと、皆之を駒木（金絲卷）に卷き附け、而して其の卷き附けたる金絲を繍地の面へ下描の形狀なりに渡し、別の細き絹絲にて一定の間隔に綴ぢ附けて行く所謂駒取繍にするのが普通であります。

而して金絲の伏繍としては、「金絲線狀繍」「金絲平埋繍」「金絲高繍」等の區別があり、其の中「金絲高繍」は和蘭陀繍と稱する繍方にて致すのが普通でありますが、其の他「平埋繍」の方法にて致す事も又籠目伏繍等に致す事もあります。

それで金絲繡は金絲一本づゝ綴ぢるのと、二本を一筋に並べてそれを一括して綴ぢるのと又三本を一筋に並べて綴ぢるのとの場合があります。一本づゝ綴ぢるのを「片駒取」と云ひ、二本を一括に綴ぢるのを「一片取」と申し三本を一筋に綴ぢるのを「一片半取」と稱して居ります。（銀絲繡は金絲繡と總て同じです）

卅七、金絲線狀繡

金絲線狀繡は繡地の面へ直線でも曲線でも自由に下描の線通りに金絲を渡し、細き絹絲にて一定の間隔に綴ぢ止めて行く方法でありまして、綴ぢ方は普通の表綴の方法にて致すのであります。

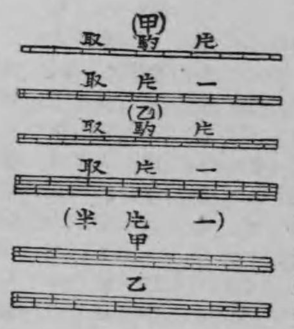
此の金絲線狀繡は前に述べた如く「片駒取」にする場合もあれば、「一片取」にて繡ふ場合もあるし、又「一片半取」に致す場合もありまして、之等は繡ふべき下描の線の太い細いに依つて適當に選ぶのであります。

然し最もよく繡地に固着卽ち落着くのは二本を一筋に綴ぢる「一片取」の方法がよろしいのでありまして、一本でも三本でもよく固着しないのであります。故になるべくは一片取に依つて繡つて行くのがよろしいのであります。

而して綴絲は一菅合せ位の極細い絹の絽絲金絲の太き場合は、もつと太き絲を用ゐ、色は常金には黃焦金には樺青金には青、銀絲には白色を用ゐます。

綴目は「一片取」や「片駒取」で只一度渡して繡ふ場合なれば、其の金絲の太さと又下描の線の形狀に應じて適當の間隔に綴ぢ止めて行くだけの事でありますが、「片駒取」又は「一片取」を二筋密接させて二度に繡ふ場合などには五の目に綴ぢて行くのが普通であります。第一圖の甲は「片駒取」及び「一片取」を只一筋だけ綴ぢ止めた所を示したものでありまして、同乙は「片駒取」及び「一片取」を二筋密接さして二度に繡つた場合の五の目の綴方を示したものであります。

第一圖



それから下の圖は「一片半取」の綴目を示したものでありまして、之は最初「一片取」に繡ひ、次に「片駒取」を其の「一片取」に密接に並べて渡し、綴ぢるときに「一片取」の綴目と五の目に綴ぢるのでありますが、此の片駒の方を綴ぢる場合に同圖の甲

に示せる如く、「片駒取」だけを別に綴ぢるのと、同圖乙に示せる如く、前の「一片取」の一本と合せて、恰度「一片取」の如く二本一括に綴ぢるのとの別があります。之は乙が普通ですが何れにても其の場合に依り又好みに依りて適宜に選ぶものと致します。

それで金絲の後前の端は繍地の表に現はしたまゝにして置くのと、又裏の方へ引き入れて置く場合とがあります。

其の裏へ引き入れる方法は、針に綴絲を環にして二本通し、此の針を繍地の表から（即ち金絲の端を裏へ引き入れる個所から）裏へと通し、而して針に通したる絹絲の環に金絲の端を潜らしたる後、針を全部裏に引き出せば、金絲の端は絹絲の環に引つ張られて裏へ引き込まれる事になるのであります。

斯の如く金絲の端を裏へ引き込む場合には金絲の端を綴ぢるとき、其の綴目より一二分程尖端を殘して切り、此の殘したる一二分の端を裏へ引き入れるものといたします。

それから一片取などで其の絲の端を二本一度に綴ぢ附けると其處が目立つて見苦しい場合には、其の端を少し出入りにして、即ち場合に應じて一本だけ五厘なり一分なり入り込ましし、先づ其の五厘なり一分なり一本になつて居るものを綴ぢ、それから二本になつて居る端を綴ぢると云ふ風にして、絲の終りのときも此の必要あれば同樣に致すのであります。

金絲繍の綴は少しも緩まず締が充分で一樣に揃ふ事が殊に必要であります。

卅八、金絲平埋繍

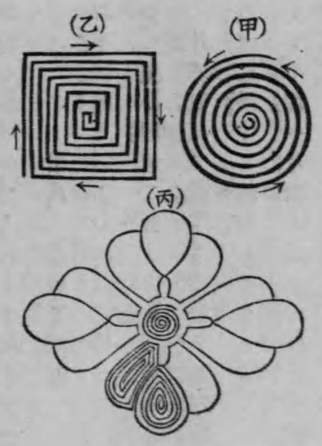
金絲平埋繍と云ふのは、前に述べた「片駒取」又は「一片取」の方法にて、或形狀の面積を平に繍ひ埋めて行く方法でありまして、一片取にて致すものを「平埋一片取」と申し、片駒取にて致すものを「平埋片駒取」と稱して居ります。猶ほ此の外に「平埋片駒返」と稱する繍方もあります。

而して「平埋一片取」と云ふのは、或形狀の面積例へば圓形とか角形の面積を一片取の方法にて平に繍埋めて行くのでありまして、其の絲の並べ方は主として渦卷形に隙かさず密接さして行くのであります。

渦卷と云ふと圓形ばかりのやうに考へられますが、角形でも三角形でも總て

其の形狀なりに連續してぐる〳〵巻になるものは渦巻と云つてよろしいのでありまして、「平埋」に於ては此の廣い意味に於ける渦巻の絲列にて目的の形狀を平に繡ひ埋めて行くのであります。

第一圖



此の渦巻の仕方は、本來は形の中心から外に向つて巻いて行くのが爲りよいのでありますが、それでは内部に區劃のない形狀を全部繡埋める場合には、中心に據るべき形がない爲めに勢ひ、最初の渦がよい加減のものとなり、輪廓の所へきて形の狂ふ虞れがあります、普通は輪廓即ち外圍から絲を渡して行く事第一圖の甲乙に示せる如く致すのであります。圖は解り易くする爲めに間が隙いて居りますが、實際には隙かず重ならず密接さして列べて行くのでありまして、一片取に於ては二本づゝ一括に綴ぢ附けながら渦巻に繡ひ進んで行くのであります。

それから此の渦巻の仕方も形に依りては、一つの形を二ツ又はそれ以上に區分して、其の區分毎に渦巻を別にして行く場合もあります。第一圖の丙に示せるものは即ち酷醬の一片を三ツの形に區分し、其の區分毎に渦巻を別々にした所を示したものでありまして、之等は其の形狀に應じて、適宜に致してよろしく、又從來より區分されて居るものはそれに從ふのがよろしいのであります。

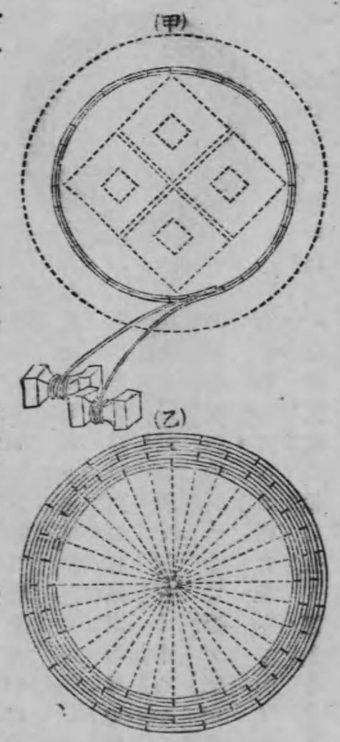
第二圖

それで渦巻は内部に區劃のない形狀を全部繡埋める場合には前に說いた如く中心から渦に巻いて行つたのでは輪廓の所へきて形が狂い易いから勢ひ輪廓の方から内部へと渦に巻いて行くのでありますが、定形なきものは内側の輪の線が區劃をなして居り、又其の輪紋などに於ける丸輪の如きものは外側の輪の線と大小の相違こそあれ形は全く同一の圓でありますから、之を云ふものは、内側の輪の線から外部へと渦に巻いて行くのがやりよいのでありまして、又さうしても、外側の輪の線の所へきて狂ふ虞れがないのであります

す。第二圖及び第三圖の甲は即ち內側より繍初めた所を示したものであります。

而して絲の初めと終りは前に說いた如く裏へ引き込む方法に依るか又表へ出したまゝにして置くかは其のものゝ粗密に應じて選び、又其の初めと終りを二本一度に並べたまゝにするか、少しく出入りにするか、その出入りも場合に應じて多くするか少なくするか等は矢張り其のものゝ粗密に應じて適當に選ぶやうに致すのであります。

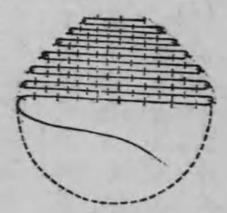
第三圖



それから綴目は大抵五の目に致しますが、其の五の目の標準は形の中心を起點とし、例へば定紋の如き太き丸輪などに付て說明すれば中心から八方へ御光

が射したやうに一定の間隔にて綴ぢて行く事第三圖の乙に示せる如くに致すのであります。斯くの如くにすると綴目が中心に靡いて體裁よくなるのでありますが、此の綴方は中心に近くなるほど綴目が細かくなり、外廓ほど粗くなりますから、其の點を斟酌して中心の方はなるべく細かに綴ぢ、それに倣ひて順次に外廓の方を綴ぢて行く事が必要でありまして、若しも中心の方を適當の間隔にて綴ぢると、外廓の所へきて粗過ぎるやうになりますから總て平埋に付けては終りまでの綴目を見計らつて其の初めの綴目の程度を定める事が必要であります。

第四圖



「平埋片駒取」は只一本づゝ綴ぢて行くと云ふだけの違ひで、他は總て一片取の場合と同じであります、

「平埋片駒返」は絲を形狀の兩端で折返しながら恰度平繍のやうに蹤かず重ならず平行に並べて其の形狀を繍埋めて行く繍方でありまして、先づ絲の端を形狀の端にて綴ぢ、平繍の向きに絲を渡し、他の端の所にて綴ぢ、そこより折り返し絲を密接させて平行に反對の端まで渡し、其の端の所にて綴ぢ、又折り返し絲を

ば密接させて平行に反對の端まで渡し、其の端にて綴ぢると云ふ風に順次之を繰返して形狀の全部を埋めるのでありまして、其の兩端の間は片駒取(又は一片取)のやうに適當の間隔にて絲を折り返し渡す度に五の目に綴ぢて行く事第四圖に示せる如く致すのであります。(圖は解り易くする爲めに絲列を隙してありますが、實際は隙かぬやうに致します。但し隙かぬやうに密接させるのが普通ですが、粗い作品になると少しづゝ間隔を一定に隙かして恰度菅繡の如き體裁に繡ふ場合もあります。此の場合は兩端の中間の五の目の綴は一片取には綴ぢられません)。

此の平埋片駒返には時に肉を入れる事があります。其の場合には緣肉にするのでありまして、緣肉の仕方は「肉の作り方」の部に說いてあります。

鵜「平埋一片取」及び「平埋片駒取」も其の絲列は隙かぬやうに密接させるのが普通ですが、之れ又「片駒返」のやうに少しづゝ一定の間隔に隙かして繡ふ場合もあります。

又稀に肉を入れる事もあります。

それから此の平埋繡の綴に付て、所々綴絲の色を變へて、綴目にて或模樣例へば麻の葉の如き模樣を現はして行く仕方もあります、之れは大體五の目に綴ぢるのですが、其の模樣を現はす部分だけは特に綴目の位置を工夫し其の模樣の綴目の絲だけ色を變へるのでありまして、此の模樣綴は金絲と相映りて頗る美しく昔は帶や衣裳に盛に用ゐましたが、現今は殆ど之を見受けず刺繡師でも其の多くは之を知らぬ有樣であります。

卅九、平金銀絲繡

平金銀絲繡と云ふのは、普通の絲の如く丸味に縒つてある絲ではなくして、平たく出來て居る金絲又は銀絲にて刺して行く繡方を申すのでありまして、此の平金銀絲には一方の面卽ち表面だけが金又は銀になつて居るものと、兩面卽ち表裏とも金又は銀になつて居るものとがあります。

而して其の太さは一寸(曲尺)を標準として四十割、五十割、六十割、七十割、八十割、九十割、百割などゝ云ふ種類がありまして、繡ふべきものに依りて之等の中から適當の太さのものを選んで用ゐるのであります。

繡方は先づ平金(又は銀絲)を目の大きい針に通し、星繡などに於けるが如く、點

の狀態に刺して行き、此の點狀を規則的に並べ、又は散らしに並べて吹雪とか緣砂などを現はすのが普通であります。又場合に依つては菅繡の如くに繡つて、別絲にて綴ぢ附けて行く場合もあります。

茲に注意すべきは、平金銀絲が片面なる場合には、表面の金(又は銀)の方を現はし、裏の方が出ぬやうにせねばなりません。

四十、紹金繡

紹金繡と云ふのは、色絲と平金とを一括に綴ぢて菅繡の如くに繡ひ、以て恰も紹に金を以て繡をせし如くにする繡方を申すのであります。

之は先づ適宜の絲を太く縒り合せ、菅繡の如く布目を拾ひて刺し渡し、(但し絲の太さに應じて布目を一ッ又は二ッ位づゝ飛ばして刺し渡し)下描の形狀通りに全部絲を刺し渡しましたれば、絲の太さに應じたる幅さの平金を刺し、渡したる絲の長さに應じて一々其の長さに切り置き、之を一々刺し渡したる絲の側面に金の方を表に出して立てかけ、然る後刺し渡したる絲と同じ色の細き綴絲にて、五厘位の間隔にて絲と平金とを一括に綴ぢ附けて行くのでありまして、綴目は五の目に致します。(平金を立てかける時は皆絲の左なら左、右なら右と一方だけの側面に立てかける事が必要であります)

斯くすると一方より見る時は絲の色のみですが他の一方を見れば金色燦爛たる間に他の色が映りて非常に美しい趣きがあります。併し此の繡は模樣物を彩繡する場合などに用ゐる外餘り廣く用ゐられて居りません。

四十一、和蘭陀繡(金絲高繡の一)

金絲高繡の内で和蘭陀繡は「平埋駒返」と同じく形狀の兩端にて絲を綴ぢながら折返し折返し絲を平繡の向きに隙かず重ならず密接に並べ渡して行くのでありまして、「平埋片駒返」は其の中間を五の目に綴ぢて行きますが、此の和蘭陀繡は中間は全く綴ぢを致さず只兩端のみを綴ぢる所が相違して居り、又「平埋片駒返」は肉を入れないのが普通ですが、和蘭陀繡の方は肉を入れるのが普通なのであります。肉は紙肉が普通で、絲肉、綿肉なども使用致します。

それで和蘭陀繡は一見した所、伏繡でなく、平繡の如く見え、又見せるやうに繡ふのでありますから、其の兩端の綴は目立たぬやうに致し、又肉の上から綴ぢる

のですから、其の綴は極固く確かりと綴ぢねばならぬので、綴絲は終りまで常に緩めず引つ張りながら綴ぢ進んで行く事が殊に必要であります。

それから絲渡りが少し長い時は、肉に姫糊を引きながら絲を繍ひ渡して行き、絲が肉に附着するやうに致します。但し糊は砂糖を少し入れて作ります。之は砂糖を入れると糊が常に濕りを帶び、パサ〳〵に乾かぬからであります。

四十二、片縒繍

片縒繍は片縒絲を以て駒取繍に繍つて行くものでありまして、其の仕方は金絲繍と同樣であります。

綴絲は細い絲を用ゐる事金絲繍の塲合と同樣ですが、色は繍絲と同じ色のものを用ゐるのが普通でありますが、塲合に依りては即ち寫實風でなく考按的のものなどには、別色のもの又は繍絲の色に近いものを用ゐる事もあります。

此の片縒繍は絲が片縒である爲めに繍の面が滑かでなくして、ざらついて居るやうな一種特別の面を現はすものでありまして、此の一種特別の面に現はれるのを應用して、或は岩や波の如きもの、又は下引繍としての鳥の鱗狀の羽毛や、魚の鱗などを現はすのでありまして、其の他應用は却々廣いのであります。

彼の劇塲などに用ゐる緞帳や幕其の他衣裳などには、金絲や他の絲の繍と共に此の片縒繍を混せてあるのを屢々見受ける事が出來るのであります。

四十三、生縒繍

生縒繍は生縒絲を用ゐて片縒繍蛇腹繍の如くに繍ふ仕方であります。

四十四、かつら繍

「かつら」繍はかつら絲と稱する片縒の緩い絲を以て、普通の絲の如く針に通し、平繍、絡繍、挿繍、菅繍等を致すのであります。

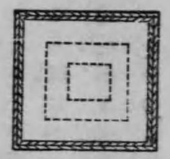
つまり「かつら」繍は繍方が特別に異つて居るのではなく、只絲が普通の絲でなく、片縒の緩いもので「かつら」絲と稱する絲を用ゐて、平繍や絡繍や挿繍や、菅繍などをするところから、特に之を「かつら」繍と稱するに過ぎないのであります。

而して此のかつら繍は縒が緩い爲めにどうも繍つて居るうちに縒が戻つたりかゝつたりして縒目が揃ひにくいものでありますから、此の點に注意して、繍ながら、指頭にて縒をかけ、又は戻す等の加減をする事が必要であります。

應用としては、片縒繍と同じく其の繍の面が波形の如きうねりをもつた一種特別の面を現はしますから、此の面に相當する方面に應用するのがよろしく、例へば此のかつら絲の挿繍又は平繍にて、松其の他の大木、岩石、雲、狀、波形などを現はすなどに適當して居ります。之は絲そのものが既に波形をして居りますから、菅繍にして波の遠景などを現はす場合などにも用ゐられます。

四十五、蛇腹繍

本蛇腹繍の圖



蛇腹繍と云ふのは、縒目が殆んど横になる位までに強く縒りたる太き絲（即ち蛇腹絲）を以て、金絲平埋繍の如く伏繍にして行く繍方を申すのでありまして、之を蛇腹繍と稱するのは、絲の縒目が強き爲め其の二筋を一線に並べて綴ぢると恰度蛇の腹の如くに見える所から斯く呼ばれて居るのであります。

而して此の蛇腹繍には、「本蛇腹繍」と「片蛇腹繍」との二通りがありまして、本蛇腹繍と云ふのは、一筋は右縒にして一筋は左縒にしたるものを上圖の如く其の二筋を一括に綴ぢ止めて行く事總て金絲平埋繍と同じ方法にて致して行く方法を申し、片蛇腹繍と云ふのは、二筋共右縒の絲を以て同じ方法にて伏繍したものを申すのであります。つまり蛇腹繍は金絲の代りに蛇腹絲を用ゐると云ふだけで金絲平埋繍の方法と少しも變りなく、又本蛇腹繍と片蛇腹繍とは只一方は右縒と左縒とを一括に向き合せ一方は右縒のみを一括にして綴ぢ止めて行くと云ふだけの違ひであります。

それで本蛇腹繍は一片取のみにて致し、片蛇腹繍の方は一片取にても致せば又片駒取にても致します。而して本蛇腹繍は場合に依りては隱し綴に致す事もあります。之は綴目が目立つて見苦しい場合に用ゐるものでありまして、其の方法は、一筋の蛇腹絲の太さの中心を貫いて針を出し、他の一筋の太さの中心に針を入れて綴ぢるのであります。

蛇腹繍は多く繍紋などに應用せられ、面に埋めて繍ふより線に渡して繍ふのが普通であります。

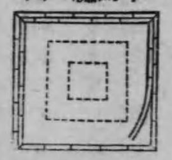
綴絲は蛇腹絲と同色に致すのが普通で、之は千鳥繍とちよつと違ふ點であります。それに千鳥繍の紋などは繍絲が白の場合もあれば淡色の場合もあり黑

の場合もあると云ふ風に樣々でありますが、蛇腹繡の紋に於ては其の蛇腹絲は白であるのが普通であります。

それで紋の形狀に依りては一片取にて致すより片駒取にて致す方がやりよいものもありまして、然樣云ふものは片蛇腹繡にすると云ふ事になりますから、本蛇腹と片蛇腹とは場合に應じて選ぶのがよろしいのであります。

四十六、千鳥繡

千鳥繡の圖



千鳥繡は片蛇腹繡と同じでありますが、絲は蛇腹絲の如く縒の強いものでなくして、縒の緩い又細い絲を用ゐ、片駒取の方法にて一本の線を二筋の絲にて現はして行く繡方であります。

從つて一本の線を現はすには片駒取にて二度に繡つて行く事になります。而して綴絲は繡絲が白色の場合には、布地の色と同じ色の絲を用ゐ、又繡絲が淡色の場合には黑色の絲を用ゐるのでありまして、つまり繡絲と綴絲と色を變へて其の綴目を目立たせるのであります。

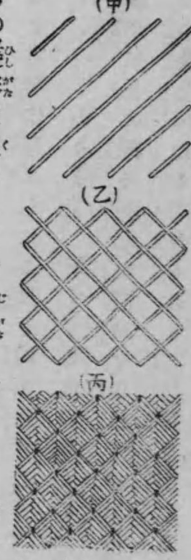
それで此の千鳥繡は或形狀の面積を埋めて行くと云ふやうな場合には、餘り用ゐられずして、蔭の繡紋などに於ける如く線を以て形を現はして行く場合に、其の線を此の千鳥繡の方法にて現はして行くと云ふやうな場合に多く應用せらるゝのであります。而して一線を二筋にて繡つて行く場合に內側の筋と外側の筋とに自然分られますが、順序は內側の筋の方より先に繡ひ、次に外側の筋を繡ひ、綴目は細かく五の目に綴ぢます。

四十七、組繡

組繡と云ふのは、絲を綾に組合せて繡つて行く方法を申すのでありまして、之には網代に組むもの、菱形に組むもの、十字形に組むもの等其の他新案すれば幾通りにもなりますが、茲では普通組繡として行はれて居る所の繡方をお話する事に致します。

即ち右圖に示せる丙は其の組繡の出來上りたる體裁でありまして、之を行ふには、先づ繡絲を一定の間隔にて右斜の向きに幾筋かを一針掛にて刺し渡す事同圖の甲に示せる如くなし、次にそれと直角にして左斜向に同じ間隔にて絲

組繡の圖

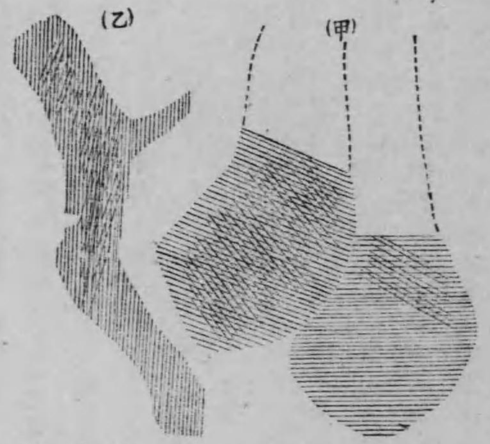


を刺し重ねる事同圖の乙に示せる如くなし、それより又右斜に前の右斜の絲に密接さして絲を刺し渡し、隣り隣りと全部の右斜の絲に同様に刺し渡して行き、次に又今度は左斜に前の左斜の絲に密接さして隣り隣りと全部の左斜の絲に刺し渡して行き、次に又右斜を前同様に、又左斜を前同様にと右斜左斜を交る交るに刺し渡して行き、全くあきのなくなるまで刺し渡したる後一番最後に組み合たる十字形に交叉したる所を同圖の丙に示せる如く細き絲にて一々綴ぢ止めて行くのであります。斯くする丙の如くに絲が組み合さり、光線の工合でそれが鱗形に見え頗る美しい體裁を現はすのであります。

絲は平絲を用ゐる場合もあり又撚絲を用ゐる場合もあり又撚絲を用ゐる場合もあり又異色のものを用ゐる場合もあります。

此の繍方は人物などを刺繍するときに其の衣裳の布地などを現はす場合に用ゐられるのでありますが、又之を金絲にて繍ひ袱紗の定紋などを現はす場合にも應用されて居ります。

之は只絲を正しく一定の間隔を置いて右斜と左斜とに交互に刺し渡して、空のなくなるまで繍埋めて行き、最後に組み合せたる十字形の交叉點を綴ぢ止めるだけの事で別に難かしい點はありませんが、其の絲の刺し渡し方は寸法正しくなす事と、最初に刺し渡す絲の間隔が組繍の角形の多きさになりますから、物に應じて其の最初に渡す絲の開隔を定める事が必要であります。



霧押の圖

四十八、霧押

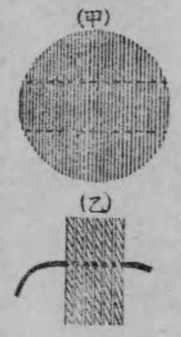
霧押と云ふのは平繍斜繍又は割繍等の絲渡りが長くて、繍絲の浮き動く虞れのある場合に、其の繍絲の上から別絲にて押へ繍をする事を申すのでありまして、其の方法は、繍糸と同じ色にて、一菅又は一菅合せ位の極細き絲にて繍の押へとして程よき所(普通繍の中央頃)を繍絲の縒目に從つて斜の向に渡して行く事

右圖に示せる如く致すのであります。若し繡絲が平絲の場合には、右縒の絲を用ゐた場合と同じ斜の向に渡します。

それで押へは目立たないのがよろしいのでありますから絲列の度も或程度に隙かして平行に渡します。

四十九、田樂押

田樂押の圖



田樂押も霧押と同じく、繡を押へて行く仕方であります、霧押の方は押絲が表面に現はれるのに反し田樂押の方は押絲が繡の中に隠れて見えぬ所が相違して居るのであります。又之は縒絲のみの繡に施すものであります。

而して此の田樂押の仕方は右の圖に示せる如く、繡ひ並んで居る絲列の全部に渡して、絲の太さの中心即ち横腹の眞中へ端から端へかけて一直線に續けて針を通すのでありまして、即ち先づ細き同色の絲を針に通し、而して右の如く一度に絲を刺し貫き、其の押絲は繡絲の終りの所にて裏へ通して留めるのであります。（押絲の初めは絲を刺すべき位置の絲列の端へ出すのであります）言葉を換へて言へば、豆腐の田樂を拵すやうに幾本の絲を一度に刺し貫いて留める所から此の名があるので、隠綴の仕方を幾本もに一度に行ふものと思へばよろしいのでありまして、又此の田樂押へは其の押絲の渡りが長き時は更に其押絲を中途にて綴ぢる場合もあります。

五十、肉入繡

肉入繡は高繡又は厚繡などゝも稱し、繡と布地との間へ或種の肉を入れて、繡を厚く高める繡方を申すのであります。

而して其の繡ひ方は只中に肉を入れると云ふだけで、繡其者は前に說きたる平繡、斜繡、和蘭陀繡等の方法にて致すのでありますから、此處には繡方の說明は省きて肉の種類と作り方、及び肉と繡との關係などに付いて順次說明する事に致します。

先づ肉の種類に付いて言へば、

(一)絲肉　(二)紙肉　(三)綿肉　(四)紙肉　(五)布肉　(六)毛肉

等の別があります。絲肉と云ふのは、繡ふべき形狀の全面又は輪廓だけに絲を

或形式に刺し渡し、之を肉として其の上から本繡をする場合を言ふのであります。して、此の肉として渡す絲を肉絲と稱して居ります。綿肉は綿を肉とし、紙肉は紙を肉とし、布肉は布を肉とし、毛肉は毛を肉とする場合を申すので、之等は皆ものに依り目的に應じてそれ〴〵適當に選ぶのであります。

第一圖

(一)絲肉の仕方……絲肉は普通木綿絲に

て致しますが、單に形狀の輪廓だけに、線狀に肉絲を渡す場合とがありまして、前のものを緣肉と申して居ります。緣肉即ち線狀肉を渡す場合と形の全面に肉絲は太き絲を肉にする場合なれば、肉絲を形狀の輪廓通りに渡して別絲にて綴ぢ附けて行く事全く駒取繡の場合と同樣に致しますが、針に通るものなれば接針繡又は返繡の方法に渡して行きます。（猶ほ緣肉は紙、縒、又は紐、棕梠の毛、馬の尾毛などを渡して駒取繡のやうに綴ぢ附けて行く場合もあります）即ち第一圖甲は駒取繡の方法にて肉絲を渡したる緣肉にて、又同圖の丙丁は接針繡にて肉絲を渡したる緣肉であります。猶ほ此の緣肉の中には線狀肉でなくして、幾分の幅さだけ輪廓なりに渡して行く事同圖の乙の如くに致す場合もあります。

斯の如き幾分幅をつけて渡して行く緣肉は、其の形狀に應じて幾分絲列に靡きを附けながら、又幅に廣狹を加減しながら繡ひ渡す事同乙圖に示せる如く致す事が必要であります。

而して全面に肉絲を渡す場合は同圖の戊に示す如く、小針に恰度挿繡に似たやうに絲列を多少喰違にして刺して行く場合と、又平繡又は斜繡の方法にて渡して行く場合と絲の數本を一括に綴ぢながら埋めて行く場合とがあります。

何れにせよ其の絲列の方向とは反對にする必要があります。例へば本繡を横列に繡ふものとすれば、肉絲は縱列の向に又本繡が縱列なれば肉繡を横列の向に繡ふのでありまして、斯くせずに、肉繡も本繡も同じ方向

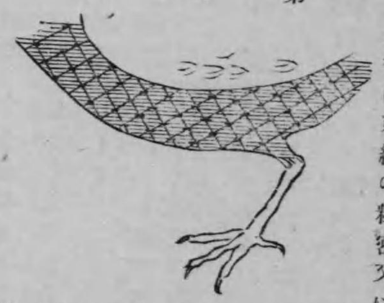
の絲列にすると、肉絲が本繡の絲列の間から飛び出す虞れがあるからです。

又肉絲の繡は本繡よりも少し内輪に繡ふのがよろしいのでありまして、其の程度は本繡をする場合に、下描の形狀通りに針を刺し得る程度の隙即ち五厘か一分位に明けるのが普通であります。

猶ほ肉繡は單に一度だけでなく、肉を厚くする爲めには、二重又は三重に繡ひ重ねる場合があります。而して其の絲列の方向は、前に說きたると同じ理由にて互に反對の向にする事が必要でありまして、例へば本繡を加へて三重に繡ふ場合には本繡を縱列に繡ふとすれば、一番下側の肉繡は本繡と同じく縱列其の次の肉繡は横列と云ふ工合に致し、又四重に繡ふ場合には、一番下側の肉繡は本繡と反對の向、其の次の肉繡は本繡と同じ向、其の次の肉繡は本繡と反對の向と云ふ樣に凡て、絲列の向を交互に反對にする事が必要であります。又繡の大きさも、下側になるほど即ち一番最初に繡ふ肉繡ほど小さくして、順次外輪に繡ふのでありまして、其の程度は前に說いた所と同じであります。

それから肉絲は木綿絲の二こ縒を一本通して一本にて繡ふ場合もあれば一本通して二本にして、又は二本通して四本にして又は四本通して八本にして繡ふ場合もあります。又絲の質も人造絹絲、毛絲又は絹絲を用ゐる場合もありまして、之等は刺繡の粗密又はものに依りて適宜に定めるのであります。

第二圖



それで肉絲に絹絲を用ゐる場合は大抵釜絲即ち平絲を用ゐるのが普通でありまして、其の絲渡りが長き時は、更に其の上へ一針掛にて菱掛をなすのであります。例へば鳥の背、頭、腹部などに釜絲にて肉を繡ひ渡す場合などがそれでありまして、即ち先づ背なら背、腹部なら腹部へ白の釜絲にて横列の向に平繡をなし、此の平繡が長渡りにて絲の密着せぬを補ふ爲めに、一菅の白釜絲を一針掛にて一分間隔位にて右斜に幾本か刺し渡し、又同じ一分位の間隔にて今度は左斜に幾本か刺し渡して菱掛をなす事第二圖に示せる如く致し、猶ほ菱掛の十文字の交叉點を同じく一菅の白釜絲にて綴ち附けて行くと釜絲の肉繡が能く密着するのであり

ます。

總て肉繍は確かりと密着するやうに繍ふ事が必要で、肉繍で見えぬからなぞと粗雑に繍ふと本繍が良く出來ませんから充分注意せねばなりません。

(二)紐肉……之は打紐を肉に渡すのでありまして大抵駒取繍の方法にて線狀に渡し、主に縁肉として用ゐられますが、又形狀の面を埋める肉としても用ゐられる事があります。

(三)綿肉の仕方……綿肉は高い肉を入れる場合に用ゐられる方法でありまして、其の方法は下描の形狀通りに綿を作りて、其の形狀の上に置き(厚さはものに應じて適當の厚さに致し)細いゾベ絲にて周圍及び其の他の要所を綴ぢ押へて行くのでありまし。又此の綿肉は形の全面でなく、縁肉として其の周圍だけに或幅さに置いて綴ぢ附けて行く場合もあります。

而して綴ぢ終りましたらば、柔かき海藻を一様に綿の表面へ指先にて塗り、其の乾きたる後に繍に移るのであります。

縁肉は鳥類、獣類、果實紋章等種々の方面に用ゐられますが就中岩の如き面積の大きい隆々としたものなどに用ゐて最も適當のものであります。

綿の質は普通の青梅綿又は古綿を用ゐてよろしいのでありますが、最も上等にするには脱脂綿と稱する綿を用ゐると細工が仕よいのであります。然し高價ですから餘り大きなものには用ゐられません。

(四)切紙肉……切紙肉は紙を下描の形通りに切り抜き之を肉として貼り附け又は綴ぢ附けて行くのでありまして、多くは張子紙を用ゐますが、又細川美濃紙などを用ゐる場合もあります。

而して一重の肉なれば單に目的の形狀通りに切り抜いて綴ぢ附け又は貼り附ければよろしいのでありますが、肉をこん盛り高くする場合には、紙を二重三重に重ね合せるのでありまして、其の方法は先づ目的通りの大きさに一枚切り抜き、之に順に形を小さく切り抜いたものを二重又は三重に貼り合せる事第三圖に示す如く致し、而して裏返し、一番大きな紙の方だけを見て表面から爪にてこいてこんもり高さを逆に

第三圖

貼り合せでない方の面につけるのであります。それより之を布地に貼り附け又は綴ぢ附けるのでありますが、二重三重に貼り合せた方が中に隠れるやう則ち表に出ぬやうにして附けねばなりません。之は貼り合せの肉を表に出すと、其の上に繡をするとき貼り合せの段が邪魔になつて、繡が肉と密着せず、従つて繡が綺麗に出來上らない憂があるからであります。

それで切紙肉を二重三重に貼り合せて、肉を高くする場合の紙は、普通貼子紙を用ゐますが、又細川、西の内などを用ゐる場合があります。

それから牡丹の葉などを肉入にする場合などには、美濃紙を葉形通りに切り抜いて貼り附け、其の上から繡をすると、美濃紙一枚だけの厚さにて平に一様の厚みに高まり、葉形などの肉として適當な所から、美濃紙も屢々用ゐられて居ります、（判紙でも差支ありません）

（五）布肉……布肉は紙肉と同じやうに目的の形通りに切り抜いて貼り附けるか綴ぢ附けるのでありまして羅紗地などが多く用ゐられます。之は紙肉より硬ばりませんから、肉の柔かいのを要する場合に適當して居ります。

（六）毛肉……毛肉は綿肉の如くに目的の形なりに作りて綴ぢ附けて行くのでありまして場合に依り毛の上に薄布などを覆ひ其の上から綴ぢ附けて行く場合もあります。之は外國刺繡などで用ゐられて居ります。

五十一、下引繡

下引繡と云ふのは繡方其のものゝ種類ではなく、一度繡をした上に更に他の繡を施す場合に、其の最初に繡つた方を下繡又は下引繡と稱し、下繡の上に施した繡を上繡又は仕上繡と稱するのであります。

それで下引繡は普通平繡又は斜繡にて致しますが、之は其の上に仕上繡をするので勢ひ普通の平繡や斜繡のときよりも絲渡りを長くしてよろしいのでありまして、即ち絲渡りが長くても上に仕上繡をするから、それにて下引繡の絲を押へる事になるからであります。尤も下引繡の絲渡りが非常に長くて仕上繡のみにては絲の押へが充分でないときは、別に押へ繡をする事が必要であります。例へば霧押へとか隠綴とか云ふ方法にて押へて行くのでありまして、霧押へにて押へるか隠綴にて押へるかはその物に依りて定めます。

而して此の下引繍は葉の全面を平繍又は斜繍にし、其の上へ葉筋を一針掛にすると云ふやうな片切繍に多く用ゐられ、又挿繍の下側に用ゐる場合もあります。（之は挿繍の場合に説明します）

五十二、仕上繍（上繍とも云ふ）

仕上繍は上繍とも云ひ、之は一旦繍つてある繍の面即ち下引繍（又は下繍とも云ふ）の上へ更に乗せ掛けて繍つて行く方法でありまして、例へば片切繍の場合に於ける葉筋の一針掛は即ち仕上繍に當るのであります。其の他梅花櫻花等を平繍にて繍ひ、其の上へ蕋を一針掛にて乗せ掛けて繍ふなども仕上繍であります。

猶ほ鳥獸昆蟲類の斑紋などを現はすには、大抵全部を挿繍に致し、斑紋の所にて絲の色を變へ、又斑紋の處にて繍を改めて現はすのが普通でありますが、又一旦挿繍又は平繍などに下引繍をなし、其の上から

斑紋仕上繍の圖

斑紋の所だけを乗せ掛けて繍ふ場合もありまして、此の場合には其の斑紋を繍ふ事が仕上繍となる譯であります。

而して斑紋を現はす場合の仕上繍は、其の絲列の方向を下引繍の繍列の方向と同じに繍ふのが、糸列の工合も亦光澤の工合もよろしいのでありますが、斯くしたのではものに依ると仕上繍の絲が下引繍の糸列の間へ潜り込む場合がありますから、餘程注意して其の虞れのないやうに刺すか、又は下引繍の糸列よりもほんの僅か向を違へて即ち絲が潜り込まぬ程度にほんの少し向を違へて繍ふ事斑紋仕上繍の圖に示せる如く致すのであります。

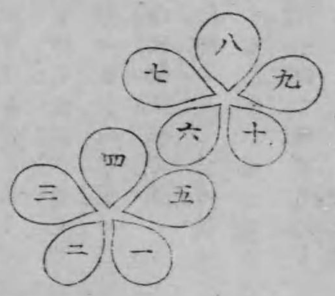
圖は解り易くする爲めに向が少し餘計に違へてあります。

要するに仕上繍と云ふのは、一旦繍つてあるものへ更に繍を加へて仕上と致す繍方を總て稱するのでありまして、從つて既に刺してある繍の上に施す毛掛。松葉掛其の他の一針掛及び繍を押へる爲めに其の繍の上に施す押繍例へば霧押への如きは皆仕上繍と稱する事が出來るのであります。仕上繍は丁寧に又巧みにせぬと醜さが目立ちますから、深く注意せねばなりません。

五十三、兩面繍

兩面繍は前にも説明した如く、繍を繍地の裏面と表面とに同じに現はす仕方でありまして、其の種類も前に述べた如く平繍、斜繍、絡繍、續繍、挿繍、一針掛等にて致すのであります。之はハンカチーフ窓掛とか兩面の見える物に施すのでありまして、其の順序は絲の色の變らぬ限りはなるべく順序よく繍續けて行くのがよろしいのであります。

兩面繍の順序の圖



然もなくして無暗に繍を區切つて絲を切ると第一、手數が掛かるばかりでなく、針止の拔け出る虞れがあるからであります。

故に上圖に示せる如く、形狀が互に隣接して居るものは、數字に示す如き順序にて隣から隣へと順序よく繍移つて行かねばならぬのであります。絲留に付いては前に述べた如くであります。其の他は斜繍や絡繍の所で述べた外は片面の繍方と同樣であります。

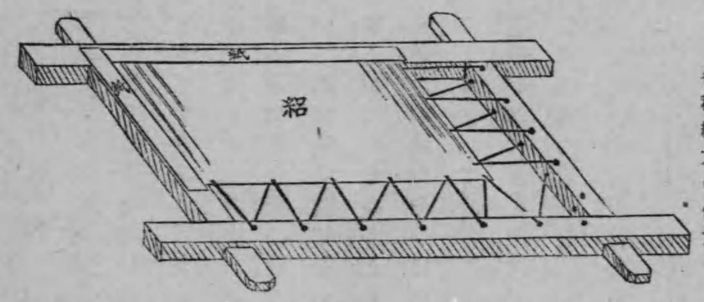
五十四、紹刺繍

紹刺繍と云ふのは、紹の布に繍をする事を申すのでありまして、即ち紹の布は御存じの如く、隙目の段がありまして、其の隙目の段が、織目の五本目毎にあるのを五本紹と云ひ、七本目毎にあるのを七本紹、九本目毎にあるのを九本紹、又三本目毎にあるのを三本紹と稱し、此の三本紹なり五本紹なりの段毎に絲を卷き搦げて、種々の圖案を繍ひ現すのであります。

從つて紹刺繍は其體裁が絨氈とか段通などの織模樣の如く、一種特別の有樣に出來上がるのでありまして、之は段目に絲を卷き搦げると云ふ一定の仕方だけで、普通の刺繍のやうに自由自在に絲を刺して行く事の出來ない爲めに起る結果でありまして、此の不自由な一定せる仕方の結果から現はれる一種特別の圖の有樣が却つて圖案的な面白味を添へて居るのであります。

而して紹刺に用ゆる紹布は、三本紹とか五本紹の如き段目の細かい方が精密な圖案を現はすに適當して居り、七本紹の如きは大ざつぱなる圖案を現はすに適當して居りまして、何れにせよ練つてない生紹を用ゐるのが繍ひ良いのであ

第一圖



ります。絲は紹刺絲と稱する紹刺專門の絲があります。編物に用ゐる穴絲を用ゐてもよろしく、又場合に依つては釜絲にて刺して見るのも面白からうと思ひます。針は紹刺針か又は木綿針を用ゐてもよろしいのであります。

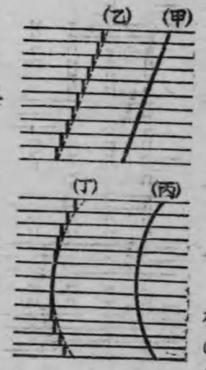
紹布の張り方は紹の布目即ち段目に歪みの出來ぬやうに正しく張る事が必要でありまして、之は刺繍臺にて張つても又特に出來て居る紹刺枠に張つてもよろしければ、小さな繪の枠の如きものに張つてもよろしいのであります。

第一圖は紹刺枠に張りたる所を示したもので、二方を枠の縁に貼り附け、猶ほ其の上に紙を貼り附けて丈夫になし、他の二方を絲にて張つたのでありますが、布の大小等に依つて或は周圍に足布を附けて

張るなり臨機應變の張り方を致してよろしいのであります。

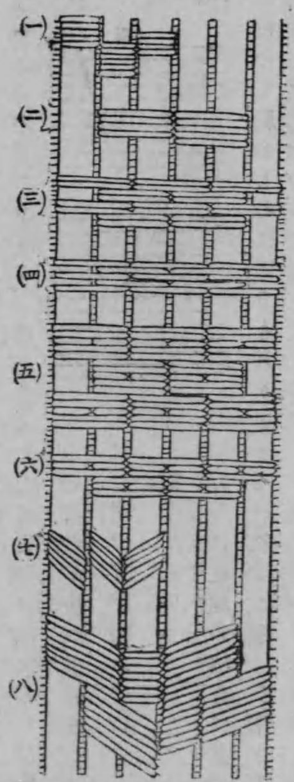
次は紹布に圖案を下描するのでありますが、之は大體の圖案を普通の繪の樣に描き、それを辿りて繍つて行つても、よろしければ、玩具の組合せ繪等に於ける如く、角目を集合さして一ッの圖案にしたものに描き、その通りに繍つて行つてもよろしいのであります。後のやうにして行けば繍ふのには樂ですが、下描をするのに骨が折れ、前の樣にすれば、下描をするには樂ですが、繍ふのに少し面倒であります。而して前のやうにして下描をした場合の繍方では、直線の場合は其の直線が布目の向になつて居るものは何でもありませんが、布目に對して斜になつて居るものは第二圖の乙の如き要領で繍ひ、曲線の場合も同圖の丁の如き要領にて繍つて行くのであります。兎に角紹刺は絲を布目なりに段に跨げて刺して行くのですから、絲列は縦なら縦一方で、其の一方の絲列にて現はされる正方形又は長方形の碁磐目の中へ圖を當て嵌めたのと同じ形式になるのであります。從つて

第二圖



紹刺の下繪は碁磐目に罫を引きたる計算圖案紙(カンバス繡の下圖を描く場合に用ゆるものと同じ)に依つて描かれるのが普通であります。此の圖案紙にて下繪を描きたる場合は、其の碁磐目一目を現はすには、紹の一段を卷き附けて、何筋目位で、一段の幅と同じになるかを數へ、例へば、一段を三筋卷き附けた所にて段の幅と同じ寸法になり、恰度繡が眞四角に現はれたとすれば、其の三筋を以て、下繪の目一ッと看做し、此の計算に依つて下繪の目と計へ比べながら繡ひ進んで行けば、特に紹布に下描をしなくてもよろしいのであります。要するに紹刺は特別の繡方ですから、圖案はそれに適當なものを選び、又適當に描いて、繡ひよい樣にするのがよ

第三圖



ろしいのです。

猶ほ圖の取り方に付ては、紹布を横紹の向のまゝ卽ち段の隙目を縞として見れば横縞の向にしたのを正面として圖案を取る場合と、縱紹の向卽ち縱縞の向にしたのを正面として圖案を描く場合とがあります。普通は縱紹の向を正面として圖を取る方が、絲列の工合もよろしいのでありますが、布地の都合や又圖案の工合に依りては横紹の向を正面として圖を取るのであります。

それより繡方に移りますが、絲はなるべく長くなく繡ひよい程度に切りて、針に刺し、而して段の隙目の所の絲と絲との間へ針を入れながら、一段づゝ又は數段づゝに跨げて絲を卷き附けて行くのでありまして、此の卷附方の相違に依つて「卷繡」「飛び繡」「かすり繡」「鹿の子繡」「斜繡」等の名稱があります。

(一)卷繡……之は一段づゝに跨げて卷き附けて行く繡ひ方で絲が眞直ぐ即ち段に對して垂直に渡るやうにして刺しながら、次の絲目の間々と絲を密接に列べながらぐる〳〵卷き附けて行く事第三圖の(一)に示す如き工合に致すもので、之は主として圖案の部分を繡ふのに用ゐられ、一番精巧に繡へる仕方ですが手

數は一番かゝる繍方であります。

此の卷繍に於て針を通す目(即ち隙目の絲と絲との間)を誤ると絲が眞直ぐの向にならずして斜になりますから、能く注意せねばなりません。

(二)飛び繍……之は第三圖の(二)に示す如く二段又は三段位を一度に卷き附けて行く繍方で、只一段と數段の違ひだけで卷繍と全く同じであります。

(三)かすり繍……之は飛び繍の目を第三圖の(三)(四)に示せる如く、一筋又は二筋づゝ交互に段違ひの五の目に繍ひ現はすもので、煉瓦積と同じ目に繍ひ現はす所から、煉瓦繍とも稱して居ります。

(四)鹿の子繍……之は飛び繍と卷繍とを混せた式でありまして、卷繍は一筋おき又は二筋おきに致す場合のある事第三圖の(五)(六)に示す如くであります。

飛繍かすり繍鹿の子繍等は地や地紋を現はすのに適當したものであります。

(五)斜繍……之は同圖の(七)(八)に示せる如く斜に卷き附けるのでありまして、一段二段等に跨げて致し、之は或模樣を現はすに適して居ります。

それで紹刺の繍ひ初めは繍の手摺れを防ぐ爲めには左上の隅から初めるのがよろしく、絲留は瘤立たず確かりとするので無論裏面にて致します。

五十五、カンバス繍

カンバス繍と云ふのは、カンバスと稱する布目の粗い布地に其の布目を拾つて主に毛絲類を斜に又は十文字等に卷き搦げて種々の圖案を現はして行く方法でありまして、紹刺繍と同じ要領の繍方であります。即ち紹刺繍は紹布の段に絲を卷き搦げるのでありますが、之は布目に卷き搦げるだけの相違に過ぎないのでありまして、從つて紹刺で出來るものはカンバス繍にて同樣に現はす事が出來るのであります。但しカンバス繍に於ては布目一ッへ卷き搦げるのを圖案紙の碁盤目一ッとして計算すればよろしいのですから、紹刺繍より計算は甚だ簡便であります。

而して絲の卷き搦げ方は一ッの布目毎に其の十文字の交叉の所へ斜に跨げて卷き搦げる樣にして全部を卷き埋めるので、十文字に卷き搦げるには、一ッの布目毎に片方は右斜に片方は左斜に跨げて卷き搦げて行くのであります。猶ほ此の卷き搦げ方は、紹刺の飛繍の如く、幾つかの目を飛ばして卷き搦げたり、斜

を矢羽の如く向合せにしたりする事もあり種々工夫の出來るものです。

五十六、白繍(白刺繍とも云ふ)

白繍即ち白刺繍は英語にて(White Embroidery, or whit work)と申し、白き布地に白き絲を以て繍を施すのでありまして、之には有孔白繍と無孔白繍との二通りがあります。

有孔白繍の方は例へば花形を其の蕋の所だけ孔を穿け、其の孔の周圍を繍ひ絡ひ、花瓣は普通に繍ふとか、又は花瓣も一ッ〳〵皆孔を穿け、其の周圍を繍ひ絡ふて形を現はすと云ふ如くに、種々考案的に孔を穿けて繍ひ、恰もレースの如き體裁に繍上げるものでありまして、從つて之を一名洗濯レースとも稱して居ります。但し白繍はどちらかと云へば實用的のものでありまして、洗濯をしても形の崩れぬやう、又色の變らぬやうにと云ふ實用的の方面から行はるゝものでありますから、針目も出來るだけ小針に又固く確かりと繍ふのを本旨として居るのであります。

無孔白繍は普通の繍方で、只絲を白にし、布を白にするだけのものであります

が、之れも實用的の見地から致すものでありますから、繍を固く確かりと致し、針目もなるべく小針に繍ふ繍方を選ぶのであります。

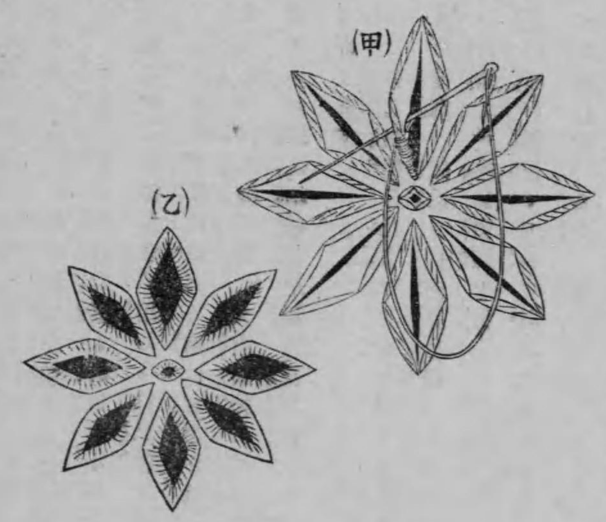
從つて有孔白繍も孔無白繍も、針目の小針である横列の平繍又は卷附繍或はスカラ繍の如き方法が多く用ゐられ、又繍を堅固にする爲めには肉を入れるのがよろしく、又洗濯等に耐える肉は絲肉かよろしいのでありますから、兩者とも絲を肉にした肉入繍と致し、又兩面繍にするのが普通であります。

絲はカタン絲麻絹絲等を用ゐ、又絁絲にて致すのが普通ですが、平絲にて致す場合もあります。

それで有孔白繍の仕方は、花形を繍ふ場合に付いて說明すれば、先づ花瓣、蕋などに其の輪廓の線通りに肉絲を繍ひ渡す事第一圖の甲に示せる如く至し、而して、其の肉絲より內を肉絲を渡した形通りに切り拔くのでありますが、其の花瓣又は蕋の形が細長くて特に其の肉絲を渡した形なりに切り拔く必要のない場合には同圖に示せる如く、縱一直線に布を切つて置き、肉絲を標準として、卷附繍を致し、其の場合に、其の切斷した所から絲を卷き搦げるやうにして、布を共に卷

き込んで仕舞ふのであります。（形の大きい時はスカラ繡に致します）

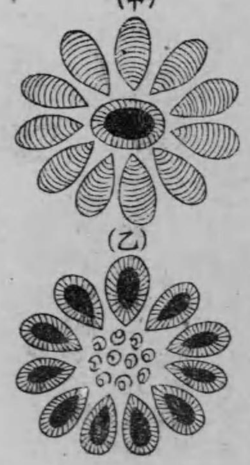
第一圖



併し形がまるい場合とか四角である場合とか又細長い形でもそれが大きいときなどには右の如く單に布を切り開いただけでは、目的の形通りに繡ひ搦げる事が出來ない場合もありますし、又縱令繡搦げる事は出來ても卷き込まれる布の部分が多くなつて工合が惡くなる場合がありますから、さう云ふ場合には肉絲を渡した形通りに其の內部を切り拔くのであります。但し肉絲の直ぐ

際を切り拔く事は出來ませんから、肉絲より五厘なり一分なり其のものに應じて布を內輪に切り拔き、然る後肉絲を標準として、ぐる〳〵卷附繡に繡ひ搦げて行くのであります。第一圖の乙は孔穿繡の出來上り圖で黑い部分は孔になつた所を示したものであります。（小さな孔は目打錐で穿けます）

第二圖

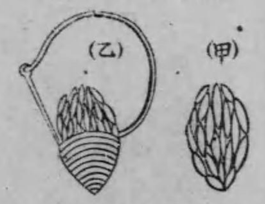


それで第一圖のものは花瓣から蕋まで總ての形に孔を穿けて繡つたものでありますが、又蕋だけに孔を穿けて花瓣は絲肉を入れた橫列の平繡にする場合即ち孔無繡にする場合もありますし、又蕋だけを相良繡にして花瓣を孔穿に繡ふ場合もあります。第二圖の甲は即ち前者で、乙は後者であります。之等は好みに依り種々考案的に自由に致して行つてよろしいのでありまして、特に斯くせねばならぬと云ふ定めはないのであります。

而して此の白繡は繡を、丈夫にする關係上、前にも述べた如く絲渡りを短く（即

ち針目を小針に繍ふ程よろしいのでありますから、孔穿に繍ふ場合は大抵幅狹く肉絲を包むだけの卷附繍に致し、孔穿でないときは肉絲を小針に渡して其の形狀を埋めること第三圖の甲に示せる如く致し、其の上を繍ふ繍ひ方は最も絲渡りの短き横列の平繍の繍方にて繍ふ事同圖の乙の如くにするのが普通であります。

第三圖



肉絲や繍絲の太細はものに依りて適當に選びますが、肉絲は比較的太い絲を用ゐるのが普通でありまして又肉は二重三重に入れる場合があります。

それから孔無白繍の仕方は矢張り今説明した如く肉絲を小針に渡して、其の形狀を埋め、其の上を繍ふ繍方は絲渡りの最も短き方法即ち横列の平繍の仕方にて繍ふのが普通でありまして、之ばかりで繍ひ孔を穿ける繍方を混せないと云ふだけの違ひに過ぎないのであります。尤も一つの花形は無孔式に他の一つの花形は有孔式にすると云ふ如き場合のないとは限りませんが、之は割合に少なく若し兩者を混せるとすれば、第二圖の甲乙の如く一つの花形等の内に有孔と無孔とを混せるのが普通でありまして加之も其の無孔の部分は有孔白繍の名稱の内に含まれるのが普通であります。應用は手巾、卓子掛、窓掛、婦人洋服、エプロン、洋傘等其だ廣いのであります。

第一圖

五十七　アップリーケー繍（切伏繍）

アップリーケー繍と云ふのは、繍地の上に更に別の布地を或形狀に裁ちて載せ其の周圍を或繍方にて綴ぢ附ける方法を申すのであります。（刺繍した物を同樣に繍附ける場合もあります。

猶ほ之は布地のみに限らず其の他押繪とか編物などを綴ぢ附ける場合もあ

第一圖

れば又同じく布地を繍ひ附けるにしても、其の布地を或襞に又は皺に形造りて綴ぢ附ける場合などもあります。第一圖に示せるものは花籠のアップリーケー繍の一部を示したものでありまして花と葉は或皺を作りて花及び葉の形に据え而して其の周圍と要所とを繍ひ附け、籠は布地を籠の形に切抜いて普通に綴ぢ附け猶ほ内部に圖の如き繍を施したものであります。第二圖は右の花籠のアップリーケー繍の全部を示したもので、之はクッション

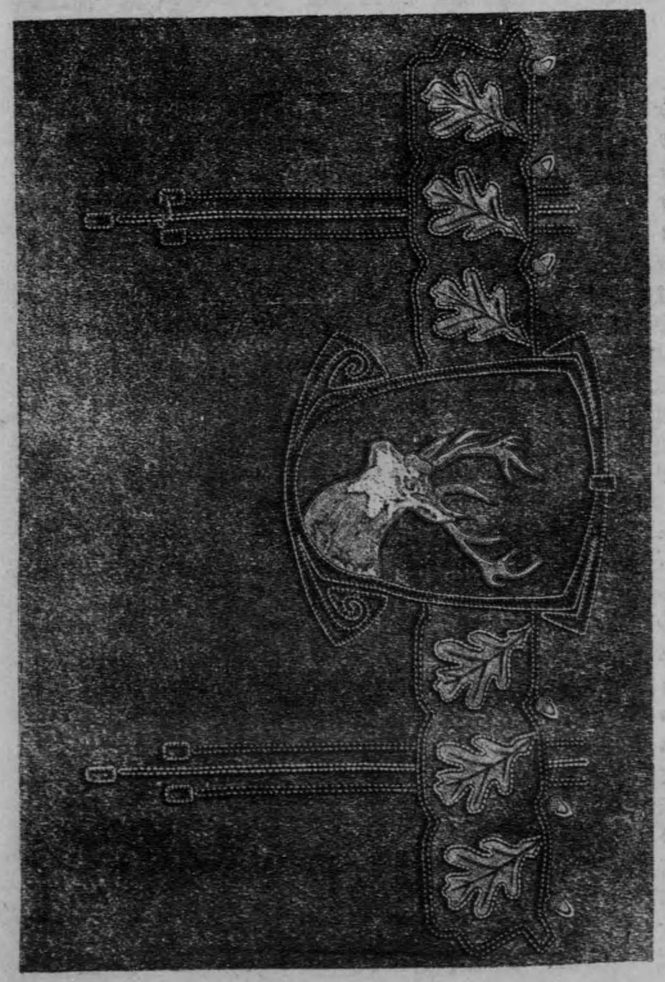
に施したものであります。

而してアップリーケーに於ける繍は單にアップリーケーの布地の周圍を綴ぢ附ける爲めに施すだけの場合と猶ほ布地の内部や外部(即ち繍地の部分)にも種々の繍を配合ふ場合もあります。又アップリーケーの布地の部分に肉を入れる場合もあります。

第二圖は布地の内外に種々の繍を配合つた例であります。而して肉を入れる場合はアップリーケーの布地の周圍の一部分を綴ぢ附けずに置き其處より綿をピンセットにて工合よく入れ、然る後其處を綴ぢ附けるのであります。それで布地の周圍を綴ぢ附けるには、卷附繍又は絡繍の如き仕方にて絲渡りを其の布地に應じて適度に致し、布地の端を隠すやうに綺麗に綴ぢ附けるか、又は鎖繍などにて布地の端を綺麗に隠して綴ぢ附けます。卷附繍の如くにして綴ぢ附けたる場合には猶ほ其の繍の上へ駒取繍などをして飾る場合もあり、其の他隨意の繍にて布地の端を隠して飾繍を致すのであります。

此のアップリーケー繍は中世紀頃はオバス、コンシュータムと云ひて第十三

第三圖



馴鹿と葉形と蕾形がアップリーケー繍其の他は配合の繍

世紀より第十七世紀にかけて歐洲にて流行し、伊太利、獨逸、佛蘭西に於ては室内裝飾に、英國にては祭壇の掛布、祭服の如きに用ゐられ、近世にては種々のものに應用されて居ります。而して之の最も奇拔なる例は嘗て佛國の博覽會に出品せる支那捕鳥の圖で、之は人物の衣服を絹布、天鵞絨、鳥獸には實物の羽毛、毛皮を使用してあつたと申します。

五十八、切嵌繍

切嵌繍と云ふのは、アップリーケー繍の如く別布を或形狀に切り拔き、繍地の方も其の形狀なりに切り拔きて孔になし、此の孔へ別布の方を嵌め込みて接ぎ、其接目に或種の繍を施して、其處を飾るのであります。猶ほ嵌込みの布の部分や其の外などへ繍を配合ふ事もあります。

五十九、接繍(掛接、桝接、織掛)

掛接と云ふのは布を接ぎ合せる繍方でありまして、即ち布の縱とか横とかを布目を揃へて接ぎ合せるのでありまして、其の方法は双方共二三分づゝ接ぎ代として折り返し、此の折目の所を揃へて中表に合せ、而して此の折目の所を卷附

繍の如き方法にて一針ぬきに布目の一筋づゝを卷き附けて接ぎ合せるのであります。又桝接は布帛に穴や疵の出來た時に布目なりに四角に切り拔き繍代を一分ほど折り返し共布其他を同じく一分の繍代をとりて其の孔に嵌るやうに計りて切り拔き掛接と同じ仕方にて接ぎ合せます。繊掛は疵を修繕するに其の布の繊目のやうに繍をするのであります。

第八節　繍切と乗掛の仕方

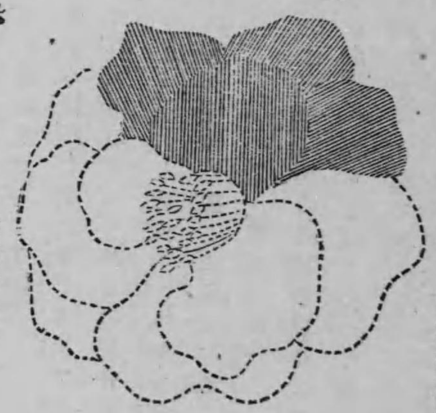
繍方の様式の中にて「繍切」と「乗掛」の二ッの別のある事は前に述べた所でありますが、今其の仕方を説明すれば左の如くであります。

一、繍切の仕方

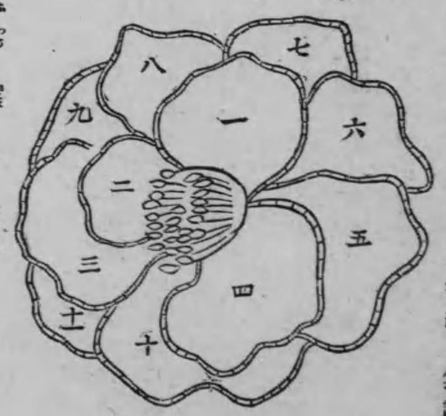
繍切は形の區別ある毎に其の區切の境から繍を別々に致して行くのでありまして、今花形を繍ふ場合に付いて説明すれば、第一圖の破線にて示してある筋は形の區切目(即ち瓣と瓣との區切目)でありますから、此の筋を境として繍を別々に致す事同圖中の上部に示せる如く致すのであります。

此の境は繍と繍とが突き合ひて隙かぬやうにするのがよろしいのであります。而して繍切は平繍、斜繍、挿繍、絡繍などに於て行はれますが、割繍も無論繍切の一種でありまして、繍方様式として最も普通に行はれる方法であります。

第一圖



第二圖



それで繍切にする場合の繍方の順序は形の區分されて居る中で、上側(或は手前側と云つてもよろしい)から順次下側(或は向側又は後側と云つてもよろしい)

へと繡ひ進んで行くのでありまして、即ち同じ花形に付いてへば、第二圖に示せる數字の順序の如く最も上側の花瓣(一)を繡ひ、次に(二)を繡ひ以下順次に繡ひ進むのであります。之は花形に限らず總ての形に於て同一でありますから能く記憶されん事を望みます。

それから同第二圖に示せる如く、境の所に緣肉を入れて行ふ場合には、針の出入は其の緣肉の方へ入れるのが普通であります。之は乘掛繡の場合でも同樣であります。但し緣肉の方へ針を出す場合もあります。之等は場合に應じ又は其の人の技倆に應じて適宜に致します。

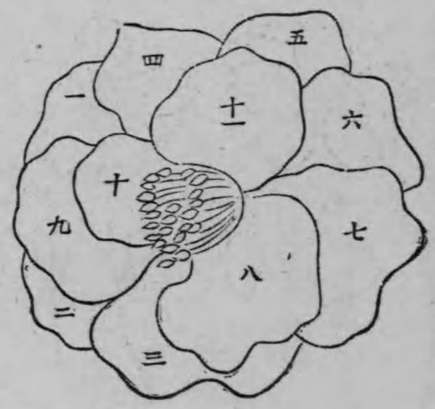
二、乘掛の仕方

乘掛は形の區切目の所を繡切の如くに繡を突き合せにせずして、少し重ね合せにするのでありまして、從つて繡方の順序は繡切とは反對に下側の方から順次上側の方へと繡ひ進んで行くのであります(第三圖の數字參照)

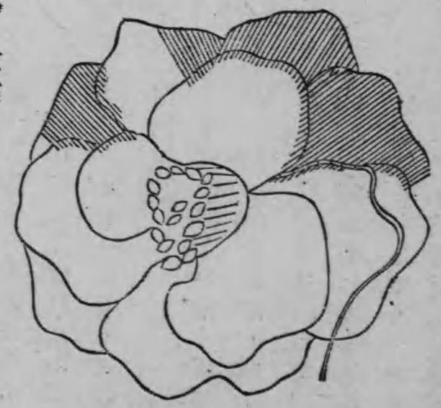
而して形の區切目即ち繡の區切目の重ね合せ方は、先づ下側の方を繡ひますが其の時區切目の所は下描の線より上側の部分の方へ五厘位ほど入り込まして繡ふ事第四圖に示せる如く致し、上側の部分を繡ふ時には此の入り込んで繡つてある部分だけへ重ね合せ(即ち乘せ掛け)て繡ふ事同圖に示せる如く致すのであります。斯くすると繡の區切目が下描の線通りの位置になり、而かも乘せ掛けになるのであります。

乘掛に於ける繡方の順序が繡切と全く正反對なのは、其の區切目を乘掛にす

第三圖



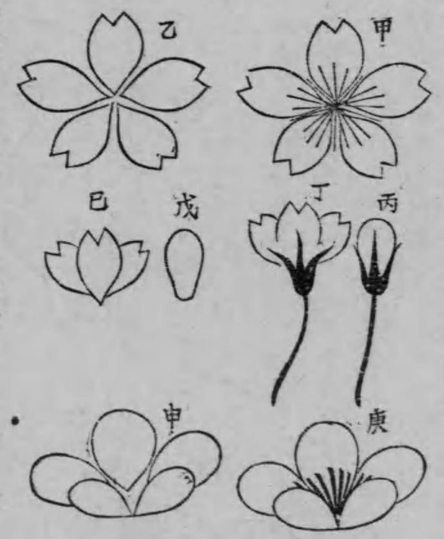
第四圖



る爲めに當然さうなるのであります。外に理由があるのではありません。

それから、乗掛に於ても縁肉を致す事がありますが、此の場合は、繍切の場合の様に最初に悉く縁肉を施すのではなくして、一區切を繍ふ毎に、入り込まして繍つた部分へ、其の上から縁肉を施し、而して繍に移ると云ふ如くに致すのであります。（第四圖參照）

第五圖



乗掛は以上の如く區切目の繍を重ね合せる事を申すのでありますが、猶ほ一旦繍つてある上へ、更に繍を施す場合も之を乗掛と申して居ります。例へば梅花なり櫻花なりを平繍などで繍ひ、更に其の上から一針掛にて蓋を繍ふ如き、又は同じく花瓣の繍の上へ、斜繍又は其の他の繍方にて蕚を繍ふ如きがそれであります。即ち前に說いた仕上繍はつまり乗掛繍に當る譯であります。

第五圖は蓋と蕚の乗掛の工合を示したものでありまして左側の方は乗掛をせぬ前の工合を示したものであります。

乗掛繍は油繪風水彩畫風等の繍潰しにするもの其の他精巧なるものに用ゐられますが、其の適不適を斟酌して應用する事が必要であります。

第九節　刺繍之暈方

刺繍に於て暈しを取るには、大體に於て「色暈し」と「繍暈」しとの二通りに區別することが出來ます。即ち左の如くであります。

一、色暈し

色暈しと云ふのは、絲の色を順次に變へて行く暈し方でありまして、例へば花瓣を瓣先から本へと赤色に暈して行く場合に付いて言へば、瓣先を適當の部分だけ赤色の絲にて刺し、次に桃色の絲にて適當の部分だけ刺し、次に時色の絲にて適當の部分だけ刺し最後に本の所を白色の絲にて刺すが如き仕方を申すの

であります。此の例は赤の暈しを赤、桃色、時色の三色にて致しましたが、もつと餘計にして、赤の濃さを五段位に分た色絲にて暈して行つてもよろしいので、之等は精密に繡ふ場合と粗雑に繡ふ場合とに應じて適宜に致します。

猶ほ瓣先の如き外廓から暈して行くのではなくて、内部から外廓へと暈して行く場合でも、道理は同じであります。

右の如き暈し方は色暈しの内でも最も普通の方法でありますが、猶ほ絞り暈し、繻交せ暈し、目飛し暈し等の方法があります。

△絞り暈し　之は絞りの様に暈す方法で例へば朝顔の花の絞り咲きの如き色彩を現はす場合に付いて言へば、白の部分は白絲で紅の部分は紅絲で繡ふことは元よりでありますが、其の絞りになつて居る所は白絲と紅絲とを交互に用ゐて斑らを現はして行くのであります、之は挿繡にて行ふのが最も適當して居ります。

△繻交せ暈し。　之は絲の色數を少なくして、加之色數を餘計に用ゐた場合と同じやうな暈しを現はさうとするに用ゐられる方法でありまして、例へば桃色と時色との二色(又は赤、桃色、時色の三色)にて暈すのを、桃色一色(又は赤一色)にて濟まさうと云ふ場合に桃色の部分は桃色の絲にて刺し、時色の部分は、桃色と白の絲を時色に見へる程度に分量を計りて、繻り交せたるものにて刺す如き又は赤の部分は赤色の絲にて刺し、桃色の部分は、赤と白とを桃色に見える程度に分量を計りて繻り交せたる絲にて刺し、時色の部分は時色に見える程度に赤と白とを繻り交せたる絲にて刺すが如き方法を言ふのであります。

△目飛し暈し。　之は平繡斜繡絡繡などに施さるゝ暈し方でありまして其の方法は、例へば葉形等で、葉先の方が茶色に變色して、暈けて居る場合に付いて言へば、初め葉先の所を適當の部分だけ茶色の絲にて密接に刺し、それより絲列一筋(即ち一目)飛ばして茶色の絲で一筋刺し、又一目飛して茶色の絲で一筋刺し、又二目飛ばして茶色の絲で一筋刺して置き、それより綠色の絲にて前に飛ばしてある空目の所を刺し埋めて行き、あとはずつと本まで綠色の絲のみで密接に繡ひ埋めて行くが如き方法を申すのであります。而して右の例は一目飛ばしを二度二目飛しを一度にしてありますが、之は形の大きさと暈しの程度に依りて三

度づゝでも四度づゝでも又目の飛し方も適當に致して行くのでありまして、之れと云ふ定めはないのでありません。

猶此の目飛しを幾分緻密にするには、飛ばし目へ埋める絲を縒交せ絲（前の例に付いて言へば茶色と綠色の縒り交せの絲）にして刺す場合もあります。

目飛し暈しは割合に應用の廣い仕方で殊に葉などに多く用ゐれます。

第一圖

（甲）

（乙）

二、繡暈し

繡暈しと云ふのは絲の色を變へて暈しを取るのではなくして、繡卽ち絲列を密接に列べると隙々に列べるとに依つて暈しを取るか又は絲列の端卽ち針目に出入をつけて暈しを取つて行く方法を申すのでありまして絲列に隙を作りて暈す仕方を「目飛し繡暈し」と云ひ絲列に出入をつけて暈す仕方を「霞り暈し」と申します。

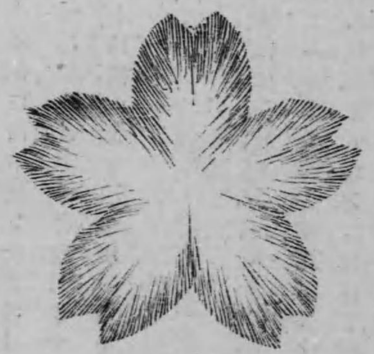
△目飛し繡暈し。之は暈しの所に於て、絲列を一目飛し又は二目飛し、三目飛しなどを順次に適當なだけ行ひて絲の密度の粗密に依つて暈しを取るのであります。

第一圖の甲は此の目飛し繡暈しの工合を示したるものでありまして、之は線にて描く陰影畫の暈しの取り方と要領は同じであります。菅繡などに主に應用されて居ります。

△霞り暈し。之は第一圖の乙に示せる如く、繪畫などに於て筆終を霞らせて描く場合のやうに、絲列に出入をつけて暈しに見せる方法でありまして、此の方法は菅繡、挿繡などにて行はれるのが普通であります。

而して此の霞り暈しの出入の工合は其の暈しの工合に應じて程よく行ひ餘り極まり過ぎないのがよろしいのであります。此の霞り暈しの應用は澤山にあります

第二圖



が光線繡などに於ける暈しの部分に行ふとか又は模樣物などで、形が大きい爲めに全部繡ひ埋めるのが工合の惡い場合などに、此の法を行ふのが適當して居

るのであります。

第二圖は卽ち櫻の模樣形を挿繡にて霞り暈しにした所であります。

猶ほ此の霞り暈しは平繡にても行ふ事が出來ますが、絲渡りが長くなる處れのある場合には平繡を適當の絲渡りだけにして繡ひ後を絡繡にて續けて卽ち持ち出して繡ふやうに致します。

以上は極大體を示したのですから、猶ほ自ら推量し、又工合する事が必要です。

第十節　各形狀の繡方順序

形狀には花鳥、人物、山水、模樣等無數の種類がありますから、之等無數の形狀に對して一々其の繡方順序を說くと云ふ事は出來ませんが、大體に於て一定の順序がありますから、之に依つて總ての形狀に應用して行けば大體に於て順序の見當が附くのであります。卽ち左の如くであります。

一、圖案の全體を標準とする場合

刺繡の圖案全體を標準としてどの部分から繡ひ初めて行くかと云ふ場合には、最も重要なる部分から順次重要でない部分へと繡ひ進んで行くのが普通であります。例へば草木の圖案に付いて言へば、先づ第一に花又は果實を繡ひ、次に葉それより幹枝と云ふ順序に繡ふのであります。但し夢と蕋は一番最後に繡ふ場合があります。之等は其の圖案に應じて適當に致します。

但し技術が初步の場合は仕損じをせぬ爲めに最も重要でないものから繡ひ初める方がよろしいと思ひます。

斯くの如く圖案全體を標準としての順序は、最も重要なるものから繡ひ初めて行くのが普通ですがものに依りては然うばかりには行かず、例へば部分々々の形狀が上下又は前後等の關係に互に重なり合つた樣子をして居る場合には繡切にすると乘掛にするとに依つて順序に相違を來すからであります。故に實際に臨みては之等の點を斟酌して其の順序を定めねばなりません。

二、部分又は一ッの形狀を標準とする場合

圖案の中の部分又は一ッの形狀を標準としての繡方順序は、全體を標準とする場合の如く大摑みに說明する事は出來ませんから、少しく種類を分て御話し

する事に致します。

(一)花形……花形は例へば五瓣あるものなれば、第一圖の數字の順序の如く先づ中央の瓣を繡ひ次に右の方の側へと繡ひ進み右側の方を繡ひ終りたらば、又中央の瓣に近き左の側の方から繡ひ進みます。或は場合に依りて中央から左へと繡ひ進み右の方を後にすることもあります。之は其の人の流儀に依つて斯くするのを普通とする向もあります。

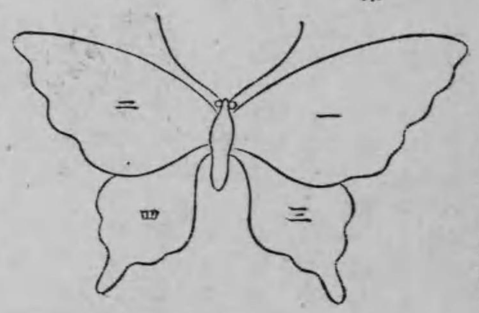
第一圖

但し花瓣の重なり合つて居る場合には繡切にするか乘掛にするかに依つて順序の違ふ事は前に述べた如くであります。

又蕋や蕚などは花瓣を繡つた後に致すのであります。但し花瓣の位置が蕋を包むやうになつて居り、花瓣の中の幾瓣かより蕊の方を先にせねばならぬ場合などもありますから、其の場合に應じて順序よく致す事が必要であります。

(二)花瓣……一瓣々々の花瓣を繡ふには、挿繡斜繡などに於ては瓣先より繡ひ初めるのが普通ですが、平繡などは中央の縦又は横の列から繡ひ初めるのが普通であります。但し斜繡などに於ては花瓣の形狀、位置、絲列の靡き等に依りては本の方から繡ひ初める場合もあります。右針左針の拜みに繡ふ菊の瓣などが其の一例です。

第二圖



(三)葉形……葉形を繡ふには葉先より繡ひ初めるのが普通でありますが、之れも形狀、位置、絲列の靡き、割繡等の關係に依つて本の方から繡ひ初める場合もあります。例へば蒲公英の葉の如きは本から繡ふのであります。

(四)果實……果實を挿繡にて繡ふ場合には、凡て上の頭の方より縦に下の方即ち莖の附いて居る方へ向けて繡ひ進むのでありまして、而して順序續いて右の方を繡ひ、次に又中央の所から左の方へと繡ひ進んで行くのが普通であります。平繡斜繡などで繡ふ場合には絲列の

第三圖

標準となるべき所から繡ひ初めて行く事前に述べた如くであります。

又葡萄の實の如く房になつて重なり居る體裁に繡ふ場合には例の繡切と乘掛に依つて下側若くは上側から繡ひ初めて行きます。

(十六)蝶類……蝶の如き蟲類を繡ふに繡切なれば、第二圖に示せる如く、先づ羽を數字の順序にて繡ひ、次に胴それから髭眼と云ふ順序に致します。乘掛なれば羽の繡方

を反對の順序に致し、それから胴、髭眼と云ふ順序に繡ふのであります、

(十七)鳥類……鳥類は姿勢に依つて違ひますが、普通は、翼、尾、背、頭、腹部、脚の順序に繡ひます。但し尾と脚は飛んで居るのと靜止して居るのと又向に依つて順序が前後する事があります。又翼の中では先の方の袋羽(丸みの羽)片切羽尖り居る羽)等を先に繡ひ肩の方を後で繡ひます。今其の順序を圖解にて示せば第三圖の如くでありまして、之は繡切の場合の順序ですが、乘掛でも袋羽と片切羽だけの順序を反對にし、あとは同樣の順序に致します。

背と眼は頭と腹部を繡つた次に繡つてもよろしく、又は脚を繡ふ前に致してもよろしいのであります。

之等は其の下繪に應じて臨機應變に都合よき順序に繡ふものと致します。

(十七)獸類……獸類は大抵挿繡で繡ふのが普通ですから、從つて其の繡方順序も挿繡に適した順序に致すのであります。而して獸類の毛並は脚胴頭と續いて居りますから、其の繡ひ初めは尾の先及び後脚の下部から繡ひ初めて漸次に胴の方へ續けて繡ひ進み、前脚の所へ來たら前脚の下部から上と繡ひ進んで胴の

所へきて前と續けて繡ひ進み、それより頭の方へと繡ひ進んで行くのであります。斯く末の方から繡ひ進んで行くのは挿繡に於ては此のやうな繡ひ進み方にする方が却つて實物通りの毛並に見えるからであります。

但し馬の尾の如きは身體を繡つた後に致します。

まだ種類を擧げれば澤山で迚も載せ切れませんから、茲では以上の如き極一般的の形狀に付いて其の繡方順序を示すだけに止めて置きます。

第十一節　仕上の仕方

刺繡の仕上げは之を能くする事が甚だ肝要でありまして、之が能くないと折角上手に繡つてあるものも引き立たず、又は醜くい結果を生じますから、能く注意して適當の方法を施さねばならぬのであります。

而して仕上げの仕方は大體左の如き順序と方法にて行ふのが普通でありまして、其の他は特殊の場合に臨みて特殊の方法を施すのであります。

(一)塵埃叩き……繡を終りて後先づ第一に行ふべきは塵埃を叩き浮す事でありまして、其の方法は尺度又は簽にて繡地を枠に張つてあるまゝにて其の裏面を適度に叩きて、繡地について居る塵埃又は粉等を浮き立たすのであります。

(二)塵埃拭ひ……次に天鵞絨蒲團にて繡地の表面に浮き立ちたる塵埃等を綺麗に拭ひ去るのですが、其の方法は繡の絲列の向なりに丁寧に拭ひ、繡を損はぬやうに致します。猶ほ油汚點等のある時は筆粉を撒布いて拭ひ取ります。

(三)繡馴らし……次は繡を平に馴らす爲めに、先づ白紙にて繡の表面を蔽ひ、而して、繡地を平坦なる板の上に置き、極く平らに削りたる丸き棒を白紙の上より輕く押しながら轉がして、繡を平らに落着かせるのであります。又場合に依りては火熨斗を輕く當てゝ繡を平らに落着かせる事もあります。何づれにしろ繡の絲列を亂さぬやうに注意しながら丁寧にいたす事が必要であります。但し肉入繡、駒取繡の類には火熨斗を當てるのは不適當です。猶ほ繡が飛々で小さい場合には質の堅い木にて極めて、平らに削りて磨き込みたる二寸四方位の厚い板を其の磨き込みたる滑かな面の方を繡の上に乗せ、繡の裏面に手又は何か平らなものにて受をなし、上から緊く壓をなして繡を平らにする場合もあり

ます。又此の厚板の磨き込みたる面に上等な蠟を極く僅かほど塗り猶蠟が落ちぬ程度に拭ひて壓をする場合もあります。蠟を塗つて壓をすると絲の毳立を落ち着かせる上に効があり又光澤を一層増すからであります。

(四)糊塗……繡を平らに馴らしたれば、次は繡の裏面に、姫糊を薄く解きたるものを指に附けて平均に薄すらと塗るのですが、之は繡つてある部分だけに施し、繡つてない地の部分には致しません。之は繡絲の伸縮を防ぐ爲めです。

(五)湯伸……之は繡に光澤を與へる爲めと且つは繡目の縮まぬ樣にする爲めに施すものでありまして、其の其法は金盥などにて湯を沸かし、其の湯氣を繡地の全裏面に當てゝ適度に濕氣を與へるのであります。但し縮緬の如き巾の伸び易きものは張を少し緩めて置いてから致します。又布地及び繡絲が褪色變色の虞れなき時は、湯氣の代りに、細かく霧を吹いて濕りを與へても或は又びつしより澤山に吹いて後で丁寧に拭き取る樣にしてもよろしいのであります。

(六)陰干……右の如くにして繡地に濕りを與へたる後は、之を陰にて自然に乾かし決して火に當てたり又は日光に晒して乾かしたりしてはいけません。之は火に當てたり日光に晒すと繡地が縮んだり色が褪色又は變色したりする虞れがあるからです。但し白繡の如きは繡の周圍を能く拭ひて日光に當てゝ直ぐ乾かす方が布地に斑が出なくてよろしい場合もあります。

(七)解外しと保存……それより繡地を靜かに臺より取外し、而して其の繡地は擴げたまゝにて適當の方法を施して仕舞つて置くか、又は太い木の丸棒に繡の表を表面に出して丁寧に卷き附けて置くのがよろしいのであります。

第十二節　繡絲の用ゐ方

繡絲はものに依りて平絲の方が適當な場合もあり、又縒繡の方がよろしい場合もあり、同じく縒絲でも縒の緩い方が適當な場合もあれば縒の强い方が適當な場合もあり、又細い方がよろしい場合もあれば太い方が適當な場合もありまして、一樣に申す事は出來ませんから、其の場合々々に應じて適當に選ぶより外はないのでありますが、大抵のものは普通の縒絲にて刺して行つて宜しいのであります。

それで繍を緻密にするとか又は薄くする場合には絲をなるべく細く致し、又繍を粗くするか或は厚くする場合には絲を太くするのでありまして、又繍の光澤を強くする場合には、平絲か、或は絽の緩い絲を用ゐ繍の光澤を弱くする場合には、絽の強い絲を用ゆるやうに致します。猶ほ繍の面を滑らかにするには、絲の光澤を強くする場合と同じく平絲か、絽の緩い絲を用ゐ、ザラついた面に繍ふには片絽絲の如きものを用ゆるやうに致します。

第十三節　刺繍術の要領

刺繍の要領は種々ありますが、先づ第一に形と色とを下繪通りに正しく又美しく現はす爲めに姿勢、針の持ち方繍地の張方、運針の順序、絲の締め工合、色の選び方、絲の選び方、仕上げ方等を正しく又適當に致し、苟くも疎かにせぬ事が必要であり、又第二にはそれ〴〵の道理を知ると云ふ事が必要であります。

今道理を知る事の甚だ必要なる一例を擧ぐれば、刺繍の專門家と素人の繍つたものを比較すると、素人のは繍に光澤がなく又は光澤の工合も惡いと云ふ事を申しますが、之は絲の締が皆平均に一樣でなく又絲列の方向、絽の用ひ方などに缺點があるからでありまして、凡よ物に光澤のあるのは、其の面が平であるからで、塵埃が附いて居たり又は凹凸して居れば平でない爲めに光澤は發しられません。故に絲を平に繍ひ並べて行けば、自然に光澤が出る譯であります。專門家の繍つたものに光澤のあるのは此の理に依つて、絲の締め工合が皆一樣の張を以てせられ、其の繍が如何にも平であるからであります。

又同じ道理に依つて、纖維の短い毳立易い絲を用ゐれば毳立の爲めに繍に光澤がなくなり、又纖維の長い毳立のない良質の絲を用ゐれば、繍が平に落着いて光澤が出るのであります。又絲列の方向、絽の工合は光線の反射に關係するからです。其の他繍の仕上げに押をしたり、火熨斗を當てたり又は塵埃を叩き落し、湯氣などを當てるのも皆繍を平にさせる爲めに外ならぬのでありまして、即ち湯氣などを當てるのも絲の毳立を落附かせ又縮むのを防いで絲を平に即ち滑らかにする効があるからであります。

斯樣に道理を知ると云ふ事は繍を手際よく導く上に必要でありますから、一

々頭を利かして道理を能く會得し、又常に研究するの態度を以て、總て適當に行ふと云ふ事を心掛けねばなりません。之れ技術に於ける第一の秘訣であります。して、名人上手が名人上手となるには一方に、練習を怠らぬと同時に、一方には常に思考し、研究して、ものゝ道理を知る事に努めるが故であります。故に刺繍を學ぶ者は道理を知りて、良き方法を選び、又必要な補助的手段等にも意を用ゐ、而して技術が意のまゝに動くやうに充分練習を積まねばならぬのであります。

第十四節　練習の仕方

刺繍の練習は矢張り易いものから難かしいものへと進んで行くのでありますが、初めは一針掛接針繍の如き繍方にて直線曲線を自在に繍ふ事を練習し、次に絡繍斜繍平繍などにて直線曲線等の線狀を細く太く樣々に繍ふ事を練習し、それより斜繍、平繍、割繍等にて圓、四角三角と云ふやうな單純にして形正しきものゝ面を埋める繍方を練習し、稍や基礎的の技術が具はるやうになつてから、複雜な形狀を繍ふ事を練習し、猶ほ挿繍、菅繍、金銀繍の如きものに順次及ぼして練習を積むやうに致すのであります。

それで何事も初めが肝腎でありますから、練習の初めに於て形を正しく現はす事と絲列の方向靡き等が適當に現はれるやうに充分に練習と研究を積む事が必要であります。而して、初めは仕損じがあり又手際よく出來ないのが當然ですから、布地なども惡く、絲も綿絲などを用ゐ太いのから細いのに進み、又縒絲から平絲に進むと云ふ如き順序に致して行きます。

又縒絲は繍つて居るうちに、幾分か縒が戻つたり又は掛つたりするもので、技術の進んで居る者が繍ふ場合には幾分縒が掛り、初學の者が繍ふ場合には縒が戻る傾きがありますから、其の邊に注意して、一ッの形を繍ふには其の形を繍ふだけの長さ即ち恰度足りる程度に見計らひて絲の長さをきめ、其の一ッの形の内で縒の强い所と弱い所とが出來ぬやうにする練習を積む事が必要であります。但し極小さい形のものを繍ふには其の一ッの形だけに足りる長さに絲をきめては餘り短すぎますから、然う云うものは二ッなり三ッなりを繍ふだけを見計ひてきめ、形の途中で絲を續がぬ樣に練習せねばなりません。

第三章　應用實習

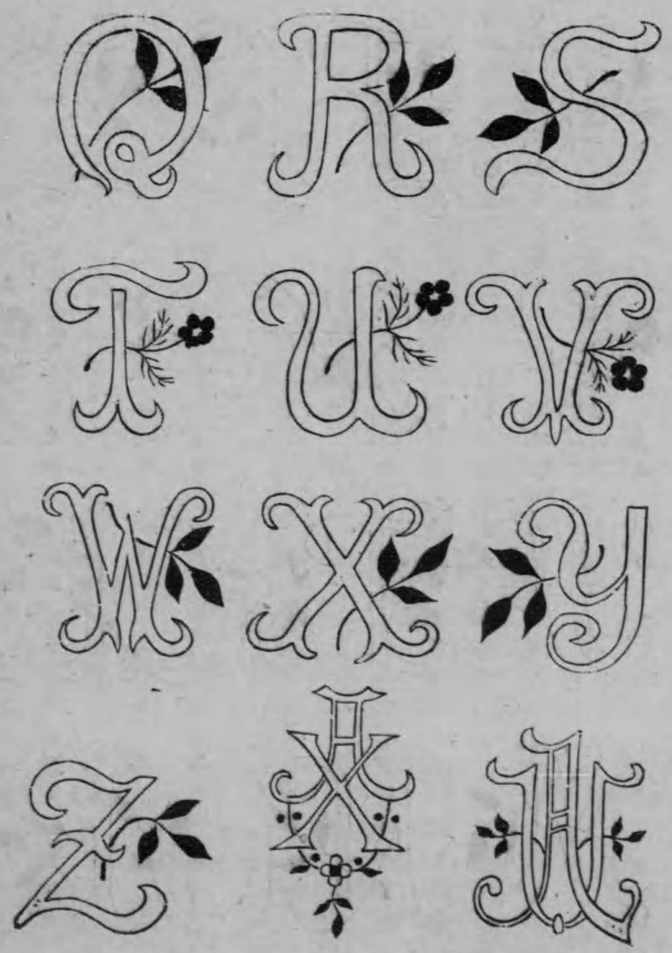
此の章に於ては第一章第二章に於て說明したる知識と技術とに基づいて、花物とか鳥類とか云ふやうな一々の圖案に付いて實際に應用して行く場合を說明するのであります。而して色彩と絲の太細、縒の有無等は下繪に依り、目的に應じて一々異りますから、之等に付いては前に說きたる知識に依つて讀者自ら適當に致す樣に任せ、茲では一々說明せぬ事に致します。

第一節　英花文字（イニシャル）

此のイニシャル卽ち英語の花文字は自分の姓名の頭文字だけをハンカチーフ其の他の物に刺繍する場合に用ゐて最も適當なものであります。左に示した二圖は英字廿六字のイニシャルでありまして、葉形を配したものと花形を配したものと二樣に示してありますから、隨意に選んで應用するのであります。而して文字の部分は卷附繍か斜繍に致し、葉形は斜繍か橫列の平繍に致します。

第一圖

第二圖



但しクローバーの葉形は縦列の平繍にしてもよろしいのです。

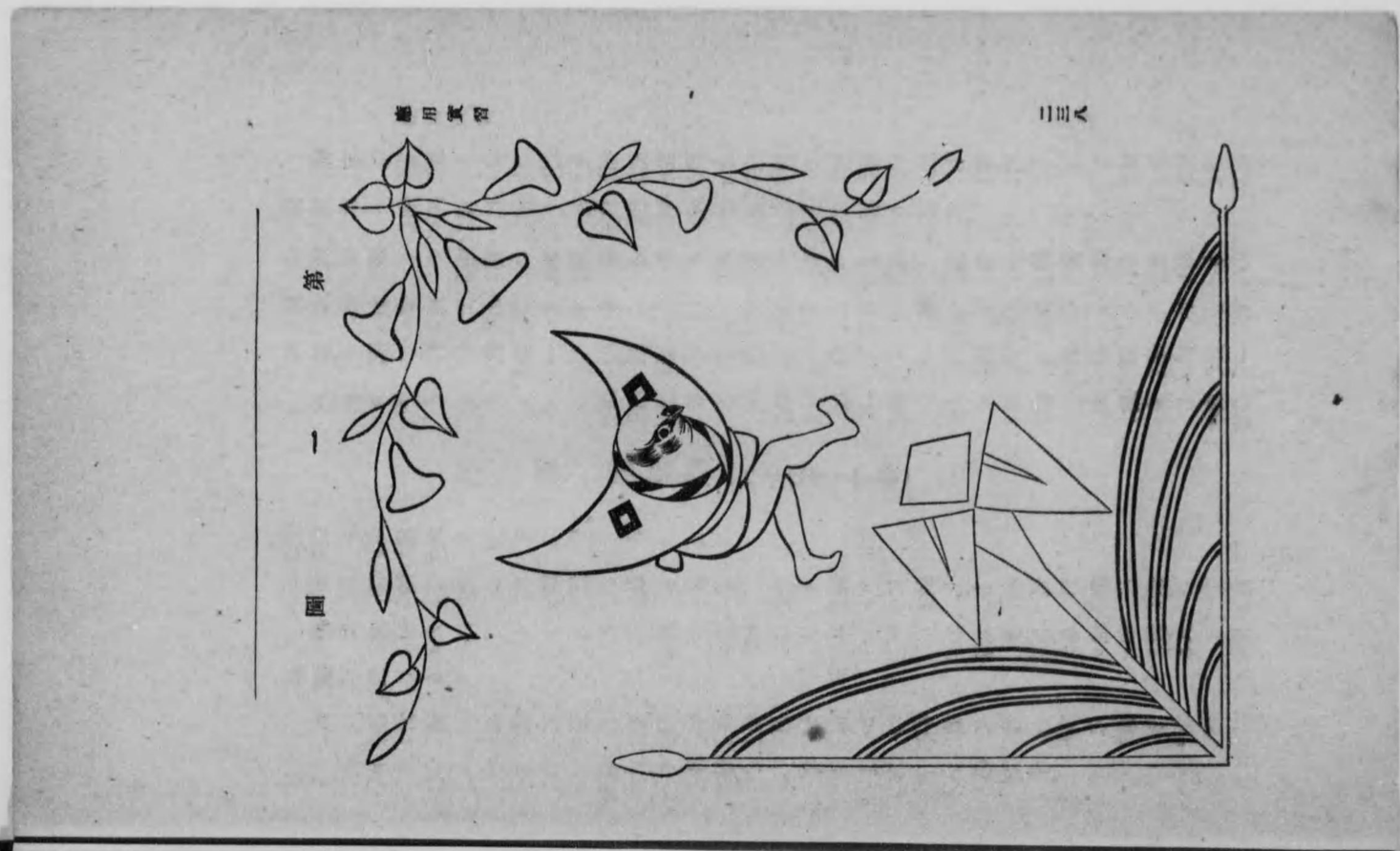
莖は接針繍か絡繍に致し、花形は縦横何れかの平繍になし、其の細き葉形は絡繍に致します。

猶ほ肉を入れてもよろしく、絲の太細はイニシャルの大きさ、布地の質又は其の他の目的に應じて適宜に致します。色も隨意に致し、ものゝ目的に依つて寫實的か考案的かにするのであります。

第二節　隅模様（ハンカチーフ等）

ハンカチーフ、テーブル掛、机掛等の四隅又は一隅に或は模様を刺繍する場合には、一隅なれば無論一つの圖案でよろしいのですが四隅でも其の圖案は皆一樣なのが普通でありますから、左に示す圖案は皆一種づゝと致しましたから、其の圖に應じて適當に應用するのが必要であります。即ち一輪薔薇や雀踊りの圖案は一隅模樣に適し、他は四隅模樣に適して居ります。

繍方は雀踊りは身體を挿繍衣服を縫繍か挿繍に致し、紋、衿、帶は平繍斜繍等に



第一圖

第二圖

第三圖

致し其の他は線の部分は接針繡、絡繡等に致し、面の部分は花形や實形は平繡か挿繡に致し、葉形は割繡、片切繡、斜繡等に致します。

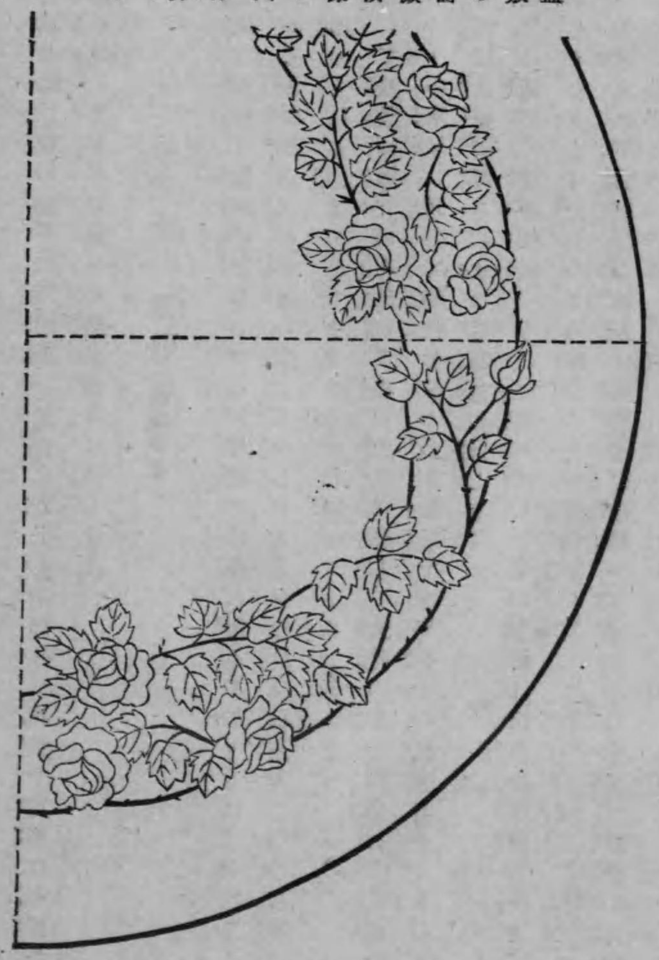
第三節　皿敷（薔薇模樣）

我國では餘り皿敷は用ゐませんが外國では盛に用ゐて居りそれに我國でもホテルとか料理店又は普通の家でも少しハイカラな所では用ゐて居つて漸次廣く用ゐられる傾きがありますから、茲に說明する事に致します。

而して皿敷は適宜の布地にて皿の大さに合して大體の形を圓形になし、緣をいろ〳〵の形狀に致して變化を取るのが普通ですが、全く其の邊は人々の好みに依つて隨意に致します。

茲では圓形に薔薇模樣のものを說明致しますが、下繪は四半分（破線の所まで）を示してありますから、あとの四分の三を皆同形に寫して圓形の圖になし、之に依つて繡地に下描をなし繡方は花と蕾を挿繡か平繡になし、葉形は割繡か片切繡か又は挿繡にして葉筋を絡繡にて現はし、枝は絡繡に致します。

皿敷の薔薇模様下圖（四分の一）



第四節　クッション（考案模様）

クッション卽ち椅子蒲團は我國でも汽車旅行などに用ゐられる場合が多いのですから、茲に說明する事に致します。

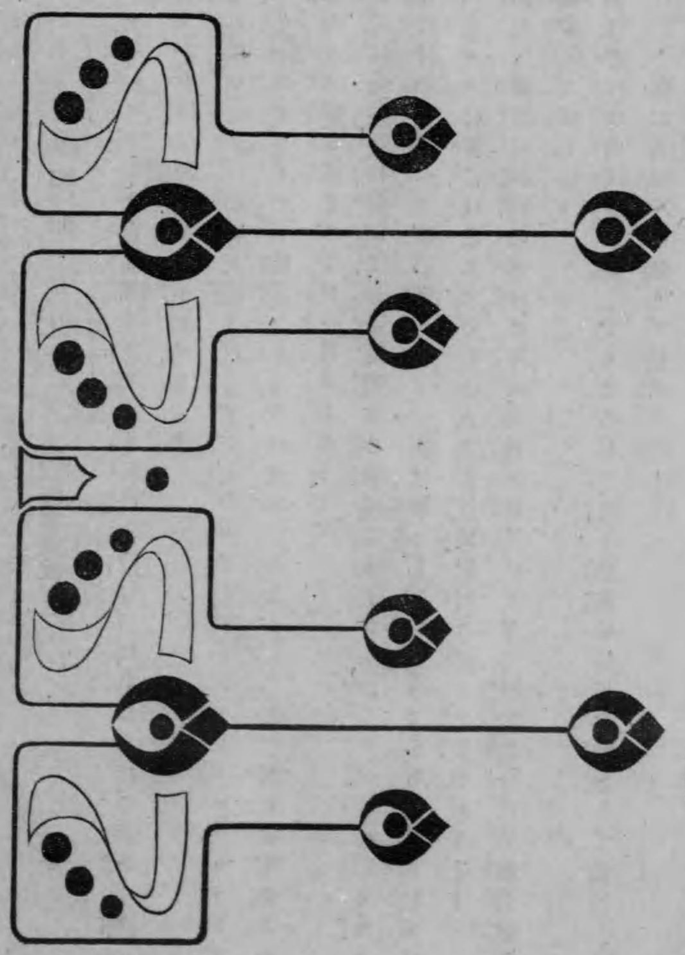
之にはいろ〳〵の繡が施されますが、其の中でも「ドロン、ウオーク」「カット、ウオーク」「アップリーケー繡」及び普通の刺繡等でありまして、其の圖案は花物あり鳥類あり考案模様ありで種〳〵様々であります。

茲ではそれ等に付いて、一〳〵說明する事は出來ませんから、次の圖に示す如き模様に付いて述べる事に致します。圖は縮小してありますから、實際に於てはクッションに當てはまるだけの大きさに下繪を引き伸す必要があります。

而して繡方は、面積の部分は平繡、挿繡、斜繡等にてなし、線の部分は絡繡、斜繡、駒取繡等にて致します。

猶ほ之れは肉入繡に致してもよろしく、絲も金銀絲などを配合して繡つてもよろしく、兎に角好みに依りて適當に致します。

ツクシヨン模様の圖

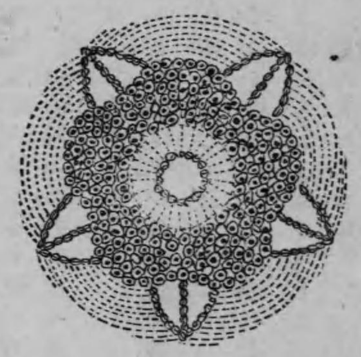


第五節　手柄

手柄は御婦人の一般に用ゐるものですから、之に刺繍する方法を知つて置くのは最も好都合であります。而して手柄は御存じの如く一掛の普通の大きさは幅二寸(又は一寸八分)丈七寸で、模様の位置は、中央部二寸五分と兩端一寸五分づゝを空間として、其の間の所へ適當の圖案を施して刺繍するのであります。

布地は主に縮緬類とし模様は種々様々でありますが、繍方は大抵相良繍、絞繍、星繍等にて致します。上圖は、椿の花の手柄模様で實物大になつて居ります。之は花瓣の部分を絞繍に、葉形と花粉とを相良繍に、蕋絲と周圍の點とを星繍に致し、色合は寫實風でも考案風でもよろしく、繍の並べ方は平均に正しく致します。

手柄模様の圖



第六節　袋物（更紗模樣繡）

袋物卽ち紙入などに更紗へ其の地模樣通りに繡を施したものを用ゐるのが流行して居り、盛に海外などへも輸出されて居りますから、其の繡方を玆に說明する事に致します。

之は木綿又は絹の更紗を角枠か丸枠にて正しく張り、而して其の地模樣通りに相良繡を施して行くのでありますが、之には地から模樣まで總て繡ひ埋めにする場合と、模樣にせよ其の形を現はす程度に繡を施し、地の部分は散らしに配置よく繡を施して置く場合とがあります。

此の繡ひ埋めにする方をベタ繡と云ひ、模樣なりに又地を散しに繡ふのをバラ繡と申して居ります。つまりバラに散らして繡ふからであります。

何づれにせよ相良繡の部分に於て說ける如く、其の繡方は結び目の方向卽ち運針の方向をば皆一樣にして光澤を一樣ならしめる事が必要でありまして、又絲は木綿更紗なれば惡いのを用ゐてよろしく、色は更紗の色に應じて致します。

第七節　半衿

半衿に模樣を施すべき位置は、丈の中央卽ち山の所から六寸五分又は七寸位の所を圖案の中央部として模樣の位置を定めるのが普通であります。而して圖案の向に依つては、右になる方と左になる方とでは模樣の向を向き合せのやうにする必要があります。此の場合には、一方は下繪を普通に寫して下描をなし、一方は下繪の表面に胡粉を塗り、而して刷り附けて下描をすればよろしい事になります。

それから張り方は刺繡臺が大きければ全部現はして張れますが、小さい時は一方を山の所が篠棒の際にくるまで卷き込んで張り、幅の方は絲でなく、篠を半衿の耳と横棒にかけて張るやうに致します。

模樣は別に示しませんから、隨意の下繪に依つて御試みなさることを望みます。

繡方は其の下繪の樣子に依つて適當に選びますが、實用向には、芥子繡、星繡、相良繡、絞繡、菅繡などが適當であります。

第八節　裾模様（三種）

裾模様の下繪は實物大にするとかなり大きな物になるので、茲では圖を縮小して示してありますから、實際に於ては之を引き延ばして下繪を作る必要があります。

比例は正しく致してありますから、圖の衽の幅を計り、之と實際の衽の幅とを比べれば其の比例が直ぐ解ります。

それで裾模様は衽だけに施すものなれば、なんでもありませんが、模様が前身頃の方へ續いて居る場合には、繍目の所から圖を二ッに分け、前身と衽とに其の分た圖を正しき寸法の位置に描かねばなりません。それに單に合せるだけでなく、繍ひ合せるのですから、繍込等いろ〳〵の方面から寸法を計りて、繍ひ上げてから正しき模様に合ふやうにせねばならず、又キチンと圖を分た通りにせず、其の境目は圖を少しづゝ增して繍が少し繍ひ込まれる位にしないと、其の合せ目の繍の所が隙になる虞れなどがありますから、模様の續目の所は餘程注意し出來上りの良いやうに致さねばなりません。

第一圖に示せるものは紅葉に瀧の模様でありまして、葉は割繍にするのが普通ですが、緻密にするには割繍と同じ絲列の靡きにて挿繍に致し、葉筋は一菅又は一菅合せの如き極く細き絲にて絡繍に致し、枝は斜繍絡繍等にて致します。但し之も緻密にするには縦の絲列にて挿繍に致し、極細き所だけを絡繍に致します。

瀧は岩圖の黑き部分も水（岩の間の白き部分）も挿繍に致し、水即ち瀧の終りの所は岩の終りの附近にて繍ひ暈しに致します。色は寫實風に致し、葉などは二色三色又は葉先の色變りの暈し等種々適宜に致します。

第二圖は鏑矢に梅散らしで、地は縞物であります。矢羽は割繍の絲列の向にて挿繍に致し、柄は斜繍か縦列の挿繍になし、矢尻も挿繍に致します。梅花は挿繍か菅繍に致し、色合は寫實風に致します。

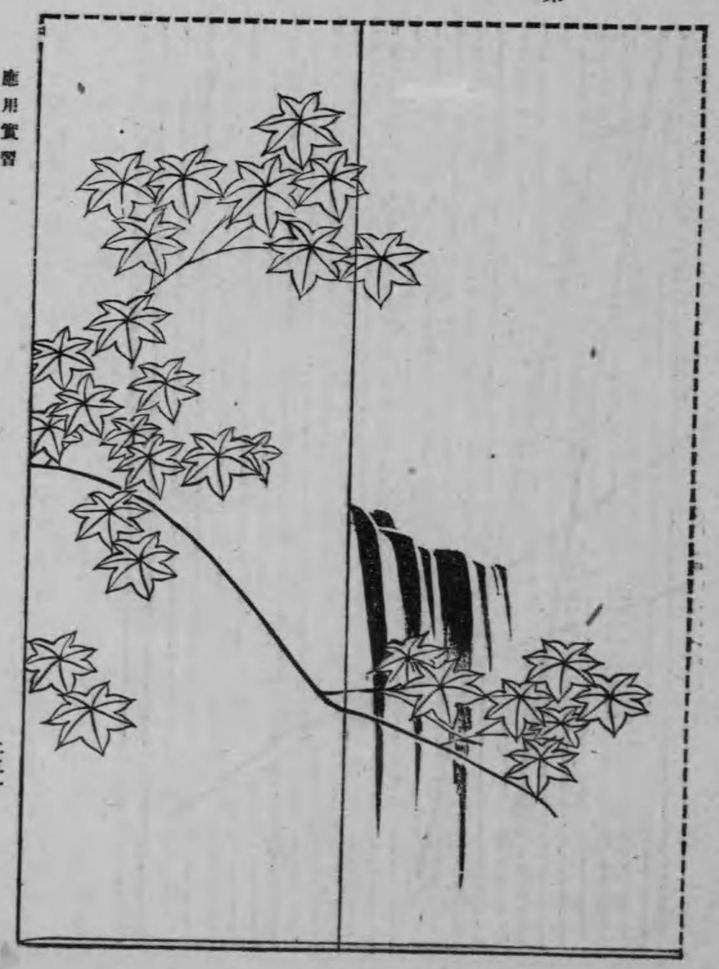
第三圖は芍藥でありまして、花は挿繍に致しますが、色は一色でも又暈しに致してもよろしく、葉は割繍の絲列の靡きにて挿繍に致し、葉筋は絡繍に致し、莖は斜繍絡繍又は縦列の挿繍に致します。蕚も挿繍に致し、蕋は蕋絲を絡繍又は一針掛にし、花粉は斜繍に致します。色は寫實風とするのが適當です。

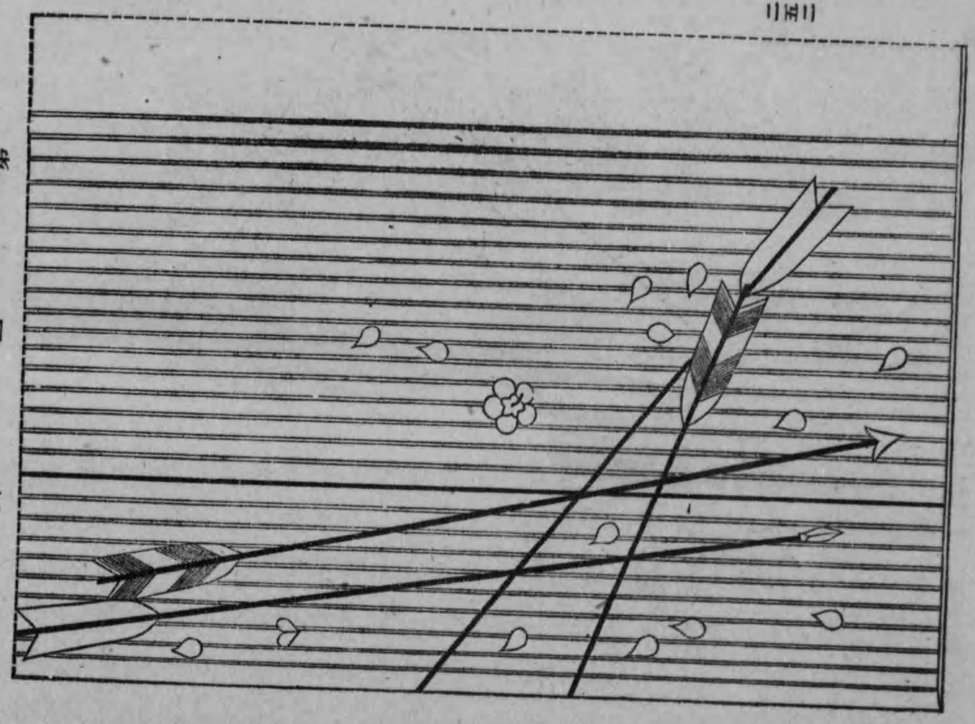
猶は此の裾模様の繡方に付きましては、現今は右に述べました如く、挿繡でも平繡でも大抵の繡方を施して一向差支ないやうになつて居りますが、昔は裾模様と言へば、菅繡か芥子繡に限つて居るやうに認められて居たものでありまして、偶々他の繡方などを施したりすると、刺繡を知らない者として却つて笑はれたものであります。

之はつまり裾模様の如き實用上の衣服に施されるものは、裝飾一點張りのものと違つて、實用と云ふ事を考へねばなりませんから、從つて實用的にして又美しく雅致のある菅繡芥子繡の如きが、裾模様の繡方として選ばれ、それが殆ど法則のやうになつたのであらうと思はれます。

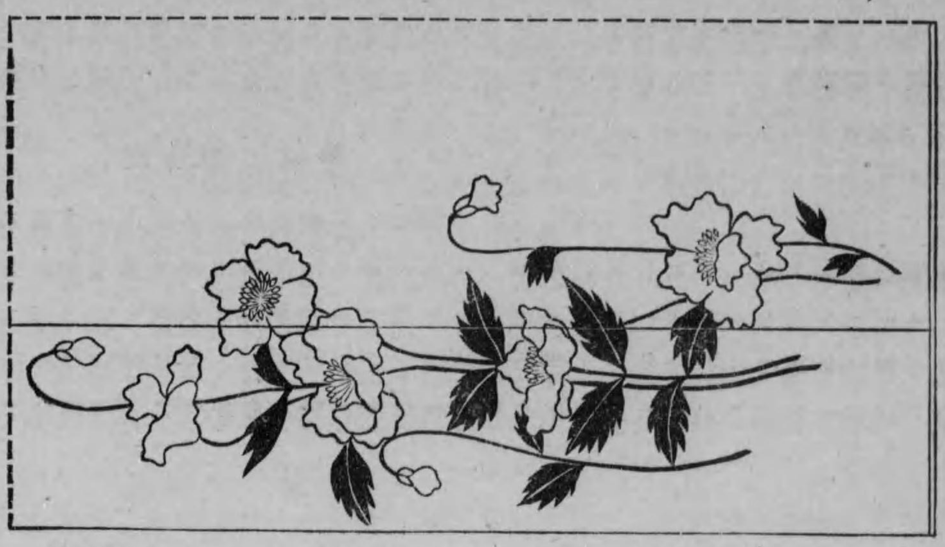
併し現今に於ては菅繡や芥子繡のみに止めては思ふやうな繡模様を現はす事が出來ないのと、それに實用よりも裝飾を主とするやうになり、模様も華美のものを好むやうになつたので、自然一般の繡方を應用するやうになつたものであります。殊にハイカラなものになると、ルビーや眞珠など樣々の寶石類や金屬類までを混えて繡ふやうな有樣であります。

第一圖





第二圖



第三圖

第九節　帶

帶に刺繍するには、普通は前と結びと垂れの三個所に施すのでありまして、前、結び、垂れの位置は其の人々に依つて實際に身體へ平常帶などを締めて見て標を附け、其の標と同じ寸法の位置へ好みの模様を下描して繍ふのであります。臺張は前結び垂れと三度に分て致します。丸帶などになりますと、普通の刺繍臺では張れませんから特別の大臺を以て張ります。

第十節　洋傘

洋傘に刺繍するには、未だ骨を附けない布ばかりの時なれば、一間（繍目と繍目までの間の部分）毎に角枠又は丸枠にて張り、好みの模様を下描して繍ひます。既に骨を附けた出來上りの洋傘に刺繍するには、傘を開いて置いて一間毎に繍ひ、骨の所に模様があれば、骨を一寸剝して除けて置いて繍ひ骨を元通り紹ち附けます。骨の附いた傘の繍方は餘り絲を締めずに繍ふ事が必要です。

第十一節　薔薇（光線繍）

茲には薔薇の花を光線繍にて繍ふ場合を説明致します。それで光線繍と云ふのは、前にも一寸述べた如く、或形狀が光線を受けると、光線を受けた部分即ち陽の部分と、光線を受けない部分即ち陰の部分とが出來ます。

而して此の陰陽のあるのを、陰の部分ばかり拾つて一つの圖案に纏めたのを繍に現はしたものを「陰の光線繍」と云ひ、陽の部分のみを拾つて一つの圖案に纏めたのを、繍に現はしたものを「陽の光線繍」と稱するのであります。

それで一ッの圖案に付いて、其の陰陽を判別する方法は、先づ茲に濃淡陰影を施した油繪なり水彩畫の下繪があるとすれば、其の色の調子を或數に區別して見ます。即ち一番濃い色と其の次に濃い色と順に淡くなつて一番淡い色まで に九つか十の色の調子を見出します。之は恰度音樂で云ふと、一二三四五六七一と云ふやうな工合で、音階の如きものであります。色ですから之は色階と申して置きます。此の色階が九つあるとすれば、其の五つ目の色が中位の色階で

ありまして、之を中間色(ミッドル、バリュー)と申します。

第一圖

而して此の中間色より濃い方の總てが陰の部分で、淡い方の總てが陽の部分であります。

故に陰の圖案に作るには、其の基となるべき下繪の陰の部分のみと形狀の區劃をなす輪廓とを拾つて一つの圖に纏め上げ又陽の圖案を作るには下繪の陽の部分のみと、形狀の區劃をなす輪廓とを拾つて一つの圖に纏め上げるのであります。

第二圖

それで繪方は先づ菅繪などが適當でありますが、其の他の繪方に致してもよろしいのであります。

第一圖は菅繡にする場合の薔薇の「陽の光線繡」の圖で第二圖は同じく菅繡にする場合の薔薇の「陰の光線繡」の圖であります。而して之を繡地に下描する場合には、同二圖の如く絲列の方向迄描く必要なく只同圖の絲列の向と布目とを合せて位置を定め、然る後繡ふべき部分だけを塗り潰しに描き、其の塗り潰しに描いた部分を布目に從つて菅繡に致せばよろしく、又色は花の部分は、花の色葉の部分は葉の色、枝の部分は枝の色(但し皆一色宛)に致します。

第十二節　桔梗

桔梗の花を繡ふには先づ花瓣の中筋を絡繡(圖が大きければ斜繡)にて先が細く元が太くなるやうに繡ひ、瓣は次の圖に示せる「イ」の如き絲列の向又は割繡の向と同じ向にて挿繡にするか或は又「ロ」に示せる如く割繡に致し、蕚は挿繡か斜繡になし、蕊は雄蕊の頭を斜繡に雌蕊の頭を相良繡等で致します。

蕾は(ハ)(ホ)の如く、挿繡にして筋を絡繡にして現はすか、又(ヘ)(ニ)の如く斜繡にして筋を一針掛にて現にすかに致します。蕚は前と同樣です。

桔梗の繡方說明圖

葉は(ト)に示せる如き絲列の向にて挿繡にするか、又は割繡或は片切繡に致し、莖は絡繡又は斜繡にて繡ひます。場合に依り絲列を縱の向にして挿繡にて莖を繡つてもよろしいのであります。

而して右に示せる圖は説明の便宜の爲めに示したものでありますから、實際に於ては、色彩を施したる完全な下繪に依つて行ひ色の工合も其の下繪に應じて其の通りに行ふ事が必要であります。

第十三節　撫子

撫子の花は瓣先が鋸齒の如くギザ〳〵になつて居り、葉も細長い形をして居りますから、繡方もそれに適する樣に致す事が必要であります。

而して花は縱列の向の靡きにて挿繡に致す事次の説明圖中の「イ」に示せる如くにいたしてもよろしければ、又「ロ」「ハ」に示せる如く縱列又は横列の向の平繡に致してもよろしいのであります。猶ほ一層精巧にするには、瓣先のギザ〳〵の山に極く細い絲にて一針掛か絡繡にて先が針の如く尖つた狀態に持ち出して

撫子の繡方説明圖

乘せ掛けに繡ふ事「ニ」「ホ」に示す如く致します。

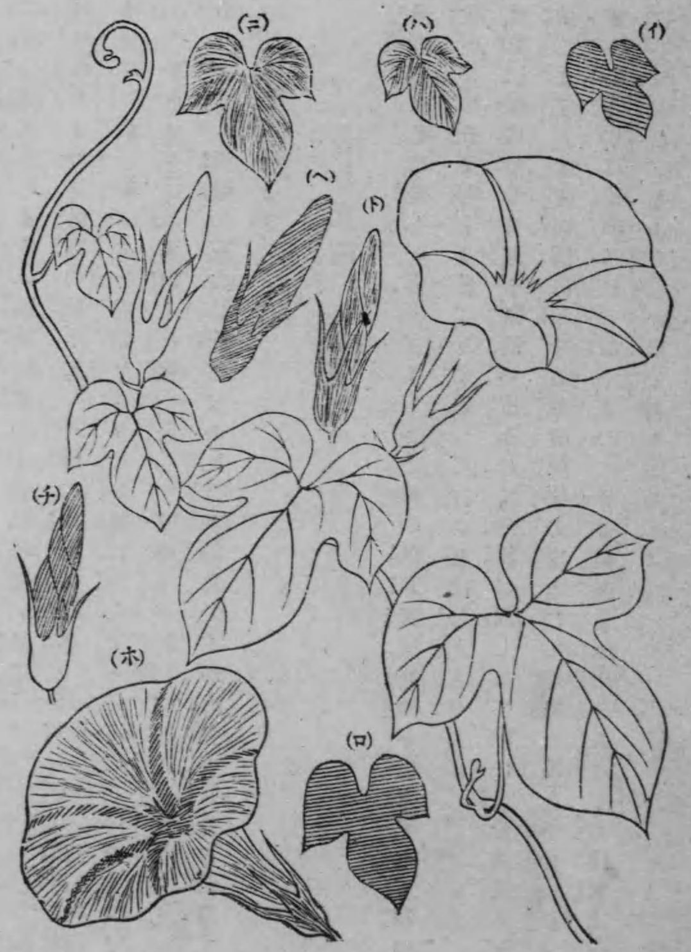
蕾は縦列の挿繡か斜繡に致し、蕚は縦列の挿繡か平繡又は斜繡にて乘せ掛けに繡ひます。葉は割繡か片切繡か斜繡に致し、小さな葉は絡繡に至します。蕊は頭を相良繡に絲を絡繡に致します。

猶ほ花を暈して繡ふ場合には下繪に依つて(イ)の如くに致しますが、平繡なれば横列の平繡に致します。

第十四節　朝顔

朝顔の花は挿繡に致しますが、靡きの工合は次の説明圖の「ホ」に示す如く致し瓣筋は同圖に示す如く斜繡に致しても、又花瓣と同じ絲列の向にて挿繡に致してもよろしいのであります。絞りに繡ふ場合には下繪に基いて色暈しに致します。蕊は僅かに頭だけより見えない位ですから、花粉だけを相良繡又は斜繡にて現はします。蕾は圖の「ト」に示す如き絲列の向にて挿繡にするか又は「ヘ」「チ」に示す如く斜繡に致してもよろしく、蕚は花又は蕾の下部に乘せかけて斜繡か

朝顔の繡方説明圖



挿繡に致し、莖は太いものは斜繡に細いものは絡繡に致します。

葉は「ニ」に示す如き絲列の靡きにて挿繡に致しても、又「ハ」に致す如く割繡に致しても或は平繡に繡ふて一針掛をする片切繡に致してもよろしいのでありまして、小さな葉は「イ」に示す如く斜繡に致して葉筋を一針掛に致してもよろしいのであります。朝顔の花は筒形になつた特別の物ですから其の特長に注意する事が必要であります。

第十五節　菖蒲

菖蒲の花は色に暈しがありますから、下繪の色彩又は實物を參考として絲の色を變へながら手際よき色ごりに繡つて行かねばなりません。

花は、第二圖に示せる如き絲列の靡きにて挿繡に致しますが、中央の瓣筋も挿繡に致します。蕾も同圖に示せる如き絲列の靡きにて挿繡に致します。極丁寧にする場合には、花瓣に枝の如く張つて居る瓣脈を極細き絲にて絡繡又は一針掛にて現はしてもよろしいのであります。

第一圖

第二圖

蓼は滿開の方にて示せる如き絲列の靡きにて挿繡にしても、又蕾の方にて示せる如く片切繡卽ち下引繡を斜繡になし、筋を一針掛にしても良いのです。

葉は縱列の向に挿繡をして、葉筋を絡繡にて現はすか、又は片切繡にて現はします。(第二圖參照)總て葉筋などを絡繡にて現はす場合は、極細き絲(例へば一菅又は一菅合せの縒絲)を以て細き筋に繡ます。莖は斜繡に致しますが、緻密に繡ふには縱の絲列にて挿繡に致します。

第十六節　百合

百合の花には種々の種類がありますが、大體に於ては同じ方法にて繡つて行く事が出來ますから、茲では姫百合に付いて說明する事に致します。それで圖では繡方を說明する便宜の爲めに示すに過ぎないのですから、實際に於ては完全に彩色を施したるものを下繪として致す事が必要であります。

花は先づ花瓣の中筋を絡繡又は斜繡になし、次に瓣を次に示せる圖中の「イ」の如き絲列の靡きにて挿繡に致し、斑點の所は絲の色を變へて挿すか、又は後に其

百合の繡方說明圖

の斑點だけを前の絲列の間へ二針三針づゝ挿し入れて現はします。或は又瓣を「ロ」の如く割繡にして斑點を後から乘せ掛けて挿してもよろしいのであります。蕋は「ニ」の如く絲筋を絡繡圖案の小なる時は綴附けの一針掛にて致し雌蕋の頭を平繡に雄蕋の頭を斜繡に致し蕾は半開は開いたのと同じに、全で蕾のものは割繡か片切繡に致します。

葉は片切繡に致すのが普通ですが、又挿繡にして葉筋を極細き絲にて絡繡にして現はす場合もあります。莖は場合に依り絡繡、斜繡、挿繡等にて致します。

第十七節　菊

菊の花にはいろ〳〵の種類がありますが、其の繡方は大抵同じでありまして花は其の花瓣の反工合に依つて右針又は左針の斜繡に致し、普通は中央より片側づゝ右針と左針に分けて繡ひ、之を拜みに繡ふと申して居ります。繡の光澤を一樣ならしむる爲めに右針若しくは左針のみにて繡ふ場合もあります。而して瓣の裏表が色變りになつて居れば、無論其のやうに絲の色を變へて繡ひま

菊の花の繡方說明圖

す。蕾の瓣も同樣に致します。(花瓣には又肉を入れる場合もあります)

蕚は縱列の向の靡きにて挿繡にするか又は平繡に致し、花粉の見ゆるものなれば花粉は相良繡にて致します。

葉形は横の平繡にして葉筋を一針掛にて現はすか、挿繡にして葉筋を極細き絲にて絡繡に致します。大きな葉形で平繡にするときは薄美濃紙を葉形通りに切り拔いて張り附け、之を肉とし其の面に砂糖糊を薄く塗り、而して横列の平繡になすのであります。莖は斜繡か縱の向の挿繡に致します。

第十八節　牡丹

牡丹は大輪のものでありますから、花は挿繡葉は平繡にして葉筋を一針掛にて現はすのが普通であります。

而して花瓣には紙縒にて緣肉を施し、反り瓣卽ち瓣が裏又は表へ反つて居る所には其の部分だけに絲肉を入れて繡ふのが普通であります。又此の反り瓣の部分だけは斜繡にする場合もあります。

牡丹の繡方・說明圖

猶ほ牡丹の花を全體に平繡にて現はす場合や、又全體に紙肉或は絲肉を入れる場合もあります。

花粉は斜繡、相良繡にて現はし、蕋絲は一針掛か絡繡にて現はし、雌蕋の頭は斜繡にて現はします。

葉形は薄美濃紙を肉として平繡にする事菊の葉形と同樣でありまして、又挿繡にする場合もあります。茎は斜繡又は縱の向の挿繡に致します。大きな圖案ですと茎も葉形の樣に紙肉を施す場合があります。

第十九節　梅

梅は樹木でありますから、草花類と違ひ、樹木の幹枝などの繡方に付て草花の茎などより複雜な仕方をする必要があります。

花は縱列又は横列の平繡か、縱列の靡きの挿繡に致し、蕋は蕋絲を一針掛、花粉を星繡か相良繡にて現はし、蕚は縱列の平繡又は挿繡にて致します。

幹や枝を簡單に繡ふには、斜繡に致し、細き部分を絡繡に致せばよろしいので

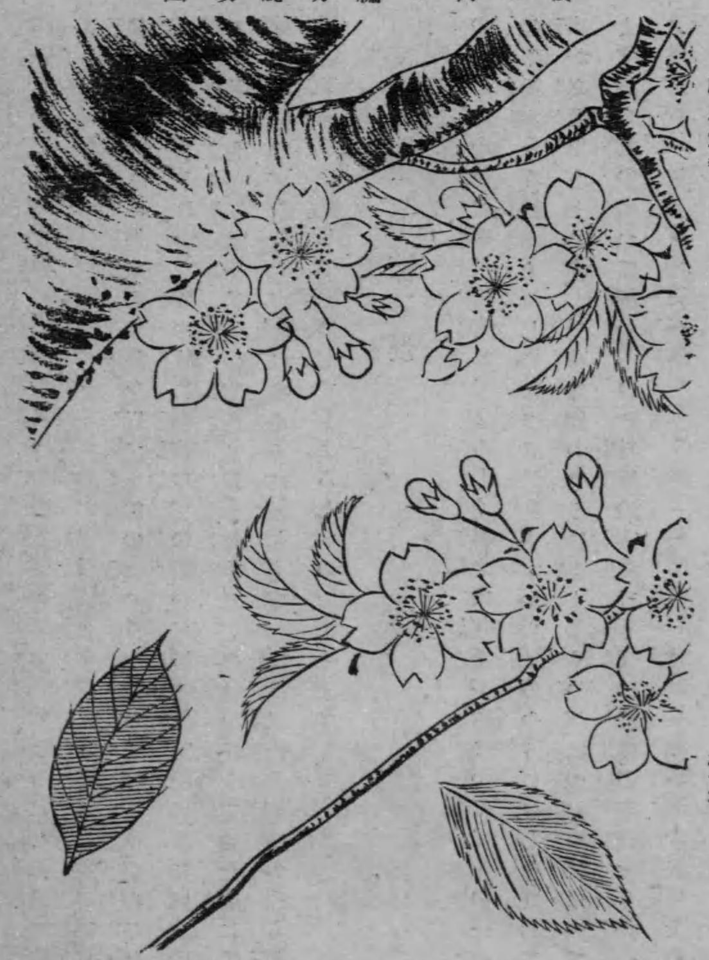
梅の樹の繡方說明圖

すが、緻密に繡ふには、普通の絹絲か又は「かつら絲」にて縱列の靡きにて挿繡に致します。或は又幹や枝の凹凸にざらついた皮の工合を現はす爲めに其の皺毎に絡繡をなし、つまり皺毎の絡繡を以て全部の幹や枝を繡ひ上げる所謂纏ひ詰めに致します。それから幹や枝に青苔などの附いて居る所を現はすには、其の苔の色の絲一色か又は白と淡い草色と暗い綠色などの絲を綾り交せた絲にて相良繡か疣挿などを施して現はすやうに致します。或は又此の苔は「かつら絲」にて挿繡平繡等に致して現はしてもよろしいのであります。

第二十節　櫻

櫻の花は梅の花と同じ繡方にてよろしく、只之は花瓣が白とか紅とかの一色ではなく瓣本から、淡赤く暈しになつて居りますから、其のやうに暈しを取つて繡ふ事が必要であります。又夢は梅のやうに丸くなく先が尖つた形になつて居りますから、其の尖つて細い所は一針掛の方法でも又は絡繡の方法でも差支ありませんが、續いて本の方は此の先の繡方に應じた絲列に繡ふ事が必要であ

櫻の樹の繡方説明圖



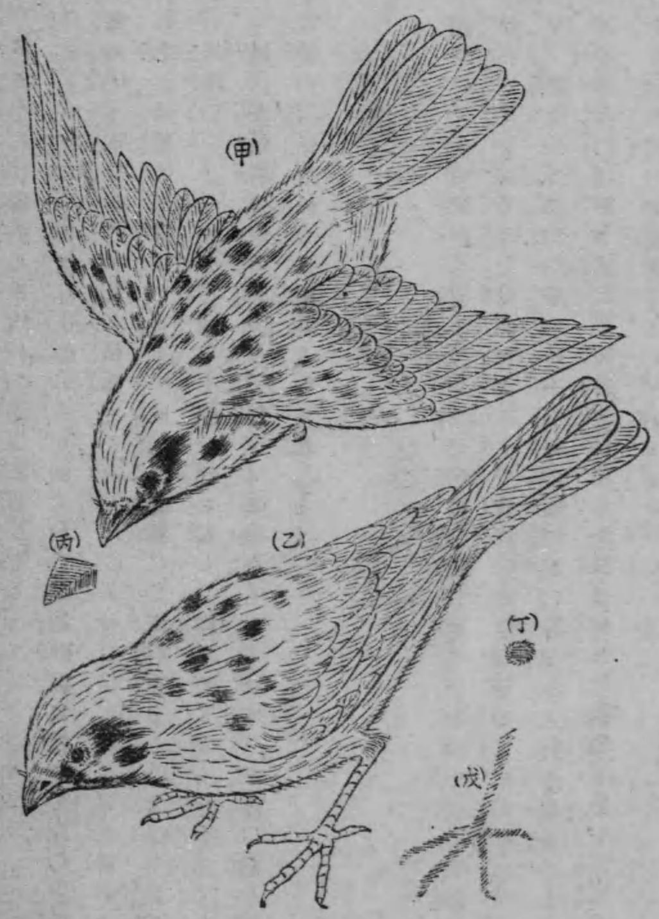
挿繡なれは縦列の靡きにて繡ふ事は例の如くであります。

幹や枝は其の皮に不規則な横皺がありますから、最初斜繡に繡ひて此の斜繡の下引繡の上へ乗せかけて此の横皺を一針又は二針位に横に繡かけ又幹の太い部分は之を絡繡にて現はします。或は又釜絲にて下引繡をしたる上へ、絡繡にて此の横皺の一ッ一ッを隙間なく繡ひ埋めながら纏詰めにする場合もあれば「かつら絲」にて横皺の向の靡きに挿繡をする場合もあります。之等は繡を粗密にする等の關係に依つて選ぶものと致します。

第二十二節　雀

雀を繡ふには、先づ翼から繡ますが、片切羽は割繡に致し、袋羽の中央の羽筋は極細き絲にて先を細く本を自然に太くして實際の如き羽筋の形に絡繡にて現はします。猶此の片切羽や袋羽の一羽毎の區切目に縁肉を入れる場合があります。其の場合には細き絲にて接針繡にするか、又は細き棕櫚の毛を一筋、形なりに渡して綴ぢ附けて肉とするのであります。

雀の繡方説明圖



それより翼の肩を挿繡にて繡ますが、之は袋羽の際の所から上へと繡進み（但し袋羽の所は毛が袋羽に蔽ひ冠さる風に長短をつけて乘せかけて挿し）斑點のある所は絲の色を變へて挿て行きます。

次は背に移りますが、之も挿繡にて尾の際（靜止して居るのは、袋羽の際）から上へと繡進み斑點の所は絲の色を變へて繡ひ、首と思ふ所にて止めます。

次に頭を繡ますが、之も挿繡にて首の所にて背の方へ絲を長短に乘せかけて挿し、嘴の所まで繡進んで行きます。

それより腹部を同じく挿繡に挿ますが、飛んで居る形のものなれば、尾の際から翼の袋羽の所まで繡つて區切り、次に翼の肩の所から嘴の所まで繡ひ進んで行きます。而して眼の附近と咽喉から胸へかけて黑き斑點がありますから、其處は絲の色を變へて繡つて行きます。靜止して居るものゝ腹を繡ふには尾の所からズッと嘴の所まで續きに繡ひ進みます。

次に尾を繡ますが、之は袋羽や片切羽と同じに割繡と斜繡にて繡ひ、羽筋は絡繡にて現はし、又緣肉を入れる場合には接針繡か棕櫚を渡して作ります。猶ほ

尾は翼の次に致してもよろしく、又静止して居る形で乗掛にて繡ふ場合には最初に尾を繡ふ場合もありますから、其の姿勢と繡の關係に依りて手順よく致してよろしいのであります。次に嘴を割繡に繡ひ(緻密に繡ふには縦列の靡き眼を一重又は二重或は三重に絲肉を渡したる後横列の平繡にて繡ひ、周圍を極にて挿繡とし)嘴の上下の境の所は極細き絲の絡繡にて筋を現はし、それより細き絲にて絡繡をなし、細き筋の縁を取ります。

それより脚を斜繡にて繡ひ爪は絡繡に致しますが、緻密に繡ふには縦列にて挿繡に致し横紋(節)は一針掛にて現はし繡方順序は爪先の方から繡ひ進みます。

それより背の輪廓腹部の輪廓頭の輪廓其の他頭と背との境、頬の所尾の際など下繪に從つて要所々々に一菅又は一菅合せの細き絲にて毛掛を致します。

猶ほ背や頭や腹部及び翼の肩の所へ肉を入れる場合がありまして、其の方法は白の釜絲一本を針に通し、頭から尾の方に向つた絲列の向にて平繡に挿し、絲の長渡りにて浮くのを防ぐ爲めに白の釜絲一菅にて一針掛の菱掛を致して押へをなし、其の上より本繡をするのであります。

又一番最初に雀の全體の形を薄美濃の紙に正しく寫して描き、而して其の輪廓通りに切り拔き之を繡地の繡はんとする正しき位置の所へ貼附け、此の貼附けたる下描の薄美濃の紙の上から繡つて行く場合もあります。

毛並や絲列の方向は「雀の繡方説明圖」に示してありますから、それに依つて下繪の色彩通りに繡へばよろしいので要するに絲列の方向は實物の毛並や羽筋などの向き通りに致せばよろしいのでありまして、此の絲列の向きや靡きや絲渡りの長さ及び色の變化などの如何に依つて其の形が生きてくるのであります。

第二十二節　鶯

鶯は雀としての形狀姿勢色合等それ〴〵の特長がありますが、大體は雀と變りなく、從つて繡方も殆んど同一でありまして、殊更に説明する必要を見ませんから之を省く事に致します。但し色彩毛並等に付ては下繪に依り又は實物の標本に依つて其の樣に繡ふ事に注意せねばなりません。

第二十三節　燕

燕も燕としての特長がありますが、繍方に於ては矢張り雀などゝ同一であります。但し尾は縦列の向の靡きにて挿繍にする方が適當であります。之も下繪に依つて色彩と毛並を注意して其の樣に繍ふ事が必要であります。

第二十四節　烏

烏も大體雀などの繍方と同樣に致してよろしいのでありますが、之は全身が黑一色でありますから、從つて羽などは一寸見た所一羽一〳〵羽明瞭に見えないので、繍にする場合に於ても特に一羽一〳〵羽を實物のやうな絲列即ち斜繍とか割繍とかにせずに總て烏の全身を挿繍にする場合もあります。此の場合にも羽筋などは矢張り附けますが、それは同じく絡繍にて現はします。

それで烏は全身を總て挿繍にしないで、普通の繍方にする場合でも嘴はあの通り大きなものですから、縦列の向の靡きにて挿繍に致し、上下の嘴の合せ

目の境は細き絲にて絡繍をして筋を現はして置きます。

眼は雀の場合と同樣に致し、脚は挿繍にして横紋を一針掛にて現はして置きます。爪は矢張り絡繍にて現はします。

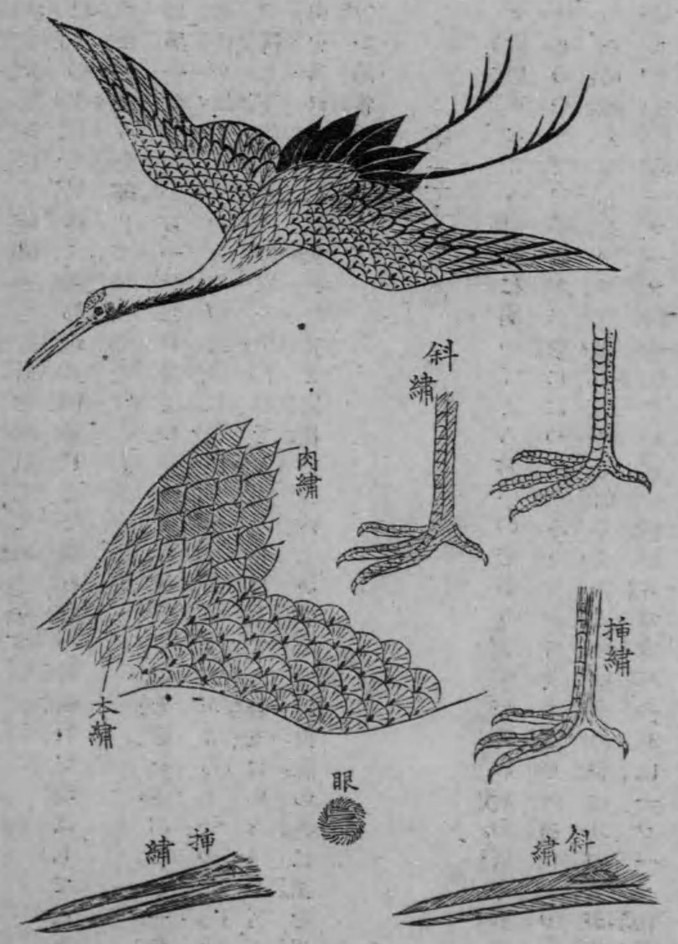
色は黑一色ですから、一色だけでよいやうなものですが、光線を浴びると一色でも濃淡が出來ますから、其の濃淡は矢張り繍に現はす方がよろしいのであります。併し下繪に依りては一色だけで濃淡なしにしても差支はありません。

又肉を入れる時には、矢張り雀と同樣でよろしいのですが、肉絲の色は黑を用ゐる方が適當であります。

第二十五節　鶴

鶴も大體雀などゝ同樣に繍つてよろしいのでありますが、翼の肩の所や背の所は地毛のやうでなく、鱗形の羽になつて居りますから、其の鱗形の羽は一ッ一ッに一々肉繍をなし、次の説明圖に示せる如く背の方の鱗形の羽は其の先が尖つて居りますから一ッ一ッ割繍になし、翼の肩の方の鱗形の羽は一ッ一ッ松葉

鶴の繡方の說明圖



掛に繡ひます。而して中央の羽筋は薄鼠色の絲にて絡繡に致します。

それから首や頭は肉を入れて挿繡に致しますが、首から胸へかけての黑手は繡目なりに從ひて絲を乘せかけて繡ふのであります。又頭、首、腹、背、翼の肩等を平繡になし、鱗形は一針掛にて現はす場合もあります。嘴は縱列の挿繡か割繡に致し鼻は黑の細き絲にて其の形の輪廓を絡繡にて繡ひ、中は淡赤の絲にて斜繡か平繡に致します。

頭部の丹頂は赤の絲にて相良繡か疣挿か又は斜繡にて現はします。尾羽は割繡ですが、挿繡にして中央の羽筋を絡繡にする場合もあります、

大正八年十二月六日印刷
大正八年十二月十日發行

實用刺繍全書

【定價金貳圓貳拾錢】

著作權所有

著作者　岡本榮次郎
著作者　木村俊臣
東京市日本橋區通壹丁目拾九番地
發行者　大倉保五郎
印刷者　村田豐吉
東京市京橋區新榮町五丁目七番地
印刷所　大倉印刷所

發行所
東京市日本橋區通壹丁目拾九番地
大倉書店
電話本局四一四・二四〇四番
振替口座東京二三八番

各種刺繍繡方實物標本販賣

初學者の便宜の爲めに最も普通に行はるゝ繡方を數種ほど選び之を上等の繡地に絹絲及び金絲にて線又は適當の形に繡ひ現はしたる實物標本を左の定價に由りて御頒け致します。

(一)甲種――絡繡、斜繡、平繡、割繡、挿繡、菅繡、星繡、相良繡、絞繡、金絲一片取等。

(二)乙種――織繡、莚繡、組繡、かつら繡、鎖繡、スカラ繡等。

兩種共定價各金壹圓〔送料〕内地金拾五錢臺灣●朝鮮●荷造費共 樺太●滿洲金四拾八錢

甲種と乙種との標本の外に猶ほ御注文に依り御希望の刺繍を殆んど實費にて製作して上げます。申込は左記の中何れかに願ひます。

發賣所

東京市日本橋區通壹丁目拾九番地 大倉書店 振替口座東京二三八番

東京市本郷區根津須賀町拾番地 女子手藝研究會 木村俊臣

東京女子高等師範學校講師 高橋岩次郎校訂
女子美術學校講師 富田輝夫著 **(忽再版)**

家庭實用 **染色工藝**

洋裝菊判布製 全壹冊 定價金壹圓七拾錢 郵税金拾貳錢

染色洗濯等一般婦人に缺くべからざる書籍の中餘りに理論に走りたるは專門家以外には却つて不便を感ずるのみならず手輕く行ひがたき事多からん、然れ共餘りに簡に過ぎたるものは亦以て得る所少なかるべし。本書は著者が色染の教師として又染色業者として從來の實務に基き之を一般家庭並に女學校に於て容易に行ひ得べき程度に豐富なる説明圖を挿入して其基礎より仕上げに至るまでを極めて實用的に而も懇切に編述せるものなれば家事には最必要なる寶典なり。又染色業者と雖も本書を一讀せば其基礎知識に觸るる事を得べし

内容

精練漂白、脱色無地染、色揚、目引、染替、絞り染、引染、糊防染、糊抜染、霧染、簡易捺染、染料配合法、洗濯、汚點抜、仕上等七編三十章

染色圖案の中にて絞り染圖案は少しく樣式を異にせるものにして其適否は加工上に難易を及ぼすは勿論複雜なる下繪と雖も屢不結果を來す事なきに能はず、故に其構圖は色彩と共に最も大切なるものなり。本集は即ち著者が從來實際に用ひたる各種の圖案を一般の家庭に女學校に將又普通染色業者の實用に供せんが爲め努めて工業上の要件を缺かざらん事を期し特に適當なる訂正を施して全體を實物大となし加ふるに用途上の分類、加工法、色彩等の説明至るまで專ら平易に編述せるものなれば既刊同種の圖案集に懐疑たる人々も本書に依りて初めて滿足せらるゝ事と思ふ。

女子美術學校講師 富田輝夫著 **(最新刊)**

絞り染圖按集

第一集 實物大圖按紙數廿六葉入、口繪石版彩色摺四葉入、説明書付 定價金壹圓參拾錢 郵税金拾貳錢

第二集 近刊 第三集 近刊

各手藝と一般圖按界の新知識

共立女子職業學校教師
木村淡香著

刺繍圖按集

本集は薄き透明紙に印刷しあれば裏から白粉にて印せば直ちに用布に寫し取られ、且つ圖樣を右向左向自由に變更し得る便利あり。一般刺繍家は勿論のこと各女學校の刺繍教科書として各學生諸姉が所持すれば一齋に下圖の供給が出來時間の節約寫損の憂なく成績の進渉數倍するに至るべし。又小中學、高等女學校生徒諸君の圖畫科、圖按宿題資料として最好の參考書たるべし。

第一集（附配色法）
第二集（附刺繍法）
第三集（附製作品應用法說明）

全三冊各 定價金八拾五錢
各郵稅金四錢

各冊石版色摺口繪入、圖按紙數三十五葉圖按數壹千餘種
製本美製菊判倍判横綴

圖按適用種類

▲刺繍下繪▲圖畫圖按宿題資料▲摘細工下圖▲押繪細工下圖▲切嵌細工下圖▲切接縫下圖▲絞り染圖按▲バテンレース下圖▲其他一切の工藝圖按

圖按應用品目

▲小形額面▲半襟▲寫眞挾▲袱紗▲裾模樣▲手提袋▲帶▲帶止▲紙入▲煙草入▲ネクタイ▲團扇▲蝙蝠▲替紋▲椅子布團▲ハンカチーフ▲テーブル掛▲技折▲蝦蟇口▲名刺入▲其他一切の小形圖按

家庭及手藝書目

—(大倉書店發行)—

東京女學館教師國分操子著
◉家庭日用 **婦女寶鑑**
一名嫁入道具
洋裝菊判布製 裝幀優美 箱入 全壹冊 正價金四圓五拾錢 郵稅金貳拾四錢
●教育界に名ある著者が吾が國家庭及一般婦人の座右の寶典として其蘊蓄を傾け、國體、皇室、教育、禮式、家政、育兒、讀書、作文、書畫、作歌、音樂、茶湯、生花、手藝其他必須智識一切を網羅す

大倉書店編
◉**實用家計簿**
洋裝四六判 製本堅牢 全壹冊 正價金六拾五錢 郵稅金四錢
●本書は最も實用向きを主として簡易に且新式なる考案の下に組織されたれば何れの家庭に於ても使用して至便也、收支計算仕譯、豫算對照、財產目錄其他必須の要項を收む、用紙最上質赤罫引製本堅牢

巖谷小波著
◉新家庭 **女、小供の卷**
洋裝四六判 函入美製 全壹冊 正價金九拾錢 郵稅金拾貳錢
●女の卷子供の卷の二編より成り前者は新家庭を造らんとする女子に與ふる著者の親察私見で後者は子供についての私見である共に家庭の人々が讀んで必ず益と興味を感ぜざること疑ひなし

不二舍直正著
◉**作歌講義**
洋裝四六判 美裝 全壹冊 正價金壹圓貳矜錢 郵稅金八錢
●本書は初心者の手引、老熟者の寶典也、我國古來より發達し來れる和歌の眞髓は勿論作歌の要項は擧げ盡へ手の屆く樣に說いてある今巖女學生の作歌上一讀の要本也

石田傳吉著
◉新編 **理想の家庭**
洋裝菊判布裝 箱入 全壹冊 正價金壹圓 郵稅金拾貳錢
●本書の理想と云ふは遠い空想的のものを云ふに非ず現在より一歩を進めて實行しの吾人が身分相應に替み得る理想の家庭について著者の沈痛なる經驗より詳論したる警醒的著述である

赤崎廣業畫伯畫
坂正臣先生和歌
◉**我子の生立**
奉書箔色木板摺 套入裝幀優美 全壹冊 正價金四圓五拾錢 郵稅金拾八錢
●本書は廣業畫伯の畫、坂先生育兒上の撰歌、三島醫學博士育兒上の注意、小笠氏儀式祝事の注意の合作に成る我愛兒の生立を記錄すべき育兒帖なれば後日の好記念なり、家庭の出產祝ひの進物には高尙の思付品也

醫學博士 吾妻勝剛著

●お産の心得 洋裝菊判 布製 全壹冊 郵税金拾貳錢 正價金壹圓參拾錢

●本書は婦人科の大家たる著者が最も通俗詳細に説かれたる產婦必讀の書也、產婦より受くる健康狀態、姙婦の日常生活、姙婦の精神感動、姙婦の生理の分娩の生理の各章數十項に亘り詳説せり

藥學士 越澤鴻滿著

●家庭日用 衛生醫典 洋裝菊判 布製函入 全壹冊 郵税金拾八錢 正價金壹圓五拾錢

●本書は簡明に且要領を摘出し家庭日常必須の衛生事項を網羅す、衣服、沐浴、看護、飲料水、育兒、食養法、轉地療養、ラヂウム、試驗法、食品保存法、化粧品の製法、家庭必要藥品其他多種有

共立女子職業學校教師 伊藤文子 小川錠子 高田久子著

●裁縫おさいく物 附實用小物 和裝菊判 美製 全壹冊 郵税金拾錢 正價金壹圓四拾錢

●別に面倒な道具を用ゐず誰にも裁縫の心得ある者は容易に出來るお細工物で其製作方法は實物大の原形圖を幾多の挿圖と相俟て懇切に説いてある、教員、女學生、家庭の人々に實益と趣味とを與ふる書である、

▲兩書の卷頭には原色石版圖と仕上げた寫眞圖全部を掲く、正編は小袋、飾置物、飾綴、巾着、手提袋等七十三、續編は小袋、針刺、肱突、ペン拭、玩具、涎掛等八十三

同

●續裁縫おさいく物 和裝菊判 美製 全壹冊 郵税金拾貳錢 正價金壹圓八拾錢

共立女子職業學校教師 木村淡香著

●和洋裁縫小きれ細工 和裝菊判美製 口繪着色圖及寫眞版圖多數入 全壹冊 郵税金拾錢 正價金壹圓貳拾錢

●家庭、教員、生徒諸嬢の爲めに小切類を平易に教示せり、內容は材料製作要項より利用しての美術製作品に付き圖を挿入して小袋、小物入、涎掛、帽子、足袋、カバー、手柄、背守、諸飾綴以下八十五點

共立女子職業學校教師 遠藤錠子 高田久子共著

●裁縫おもちや集 和裝菊判美製 口繪仕上品原色圖入 全壹冊 郵税金拾錢 正價金壹圓

●本書は裁ち餘りの小切で家庭實用の美事なおもちやが出來ます、説明は懇切であるから何人にも習得容易です、製作要項、手毬、お手玉、がらん〳〵人形、動物、車及航空機等三十七種有り

共立女子職業學校教師 木村淡香著

●新案裁縫小物全書 和裝菊判美製 口繪着色圖及寫眞版圖仕上圖入 全壹冊 郵税金拾貳錢 正價金壹圓八拾錢

●不用の小切類で巧妙な美術的實用品が出來る樣に一々原型圖と挿圖とで解り易く説く、針差、小袋、巾着、肱突、涎掛、手提袋、緣かざり、紹刺法、帽子、ネクタイ、裁縫玩具、其他種々あり

中村興湖、村井秋翠共著

●家庭袋物細工全書 和製菊判美製 口繪製作品全部寫眞版圖挿入 全壹冊 郵税金拾貳錢 正價金壹圓五拾錢

●袋物一切の製作法並に必要なる要項は悉く述ぶ圖解と共に説明懇切獨習容易也原型圖あり直に形紙を造り得らるす法も附してある故自ら製圖して形を切ることも出來る、家庭及學生の好伴友也

共立女子職業學校教師 山田きよ子 種村なか子共著

●袋物細工の技折 和裝菊判美製 口繪製作品全部寫眞版圖挿入 全壹冊 郵税金拾貳錢 正價金壹圓五拾錢

●上下二編に別ち獨習者の爲めに順を追ふて懇切に説明す挿圖及原型圖を添ふ上編は必要なる要項を述べ下編は製作法二十二章に亘り説けり家庭及學生諸嬢の獨習並に檢定受驗の好伴也

撮み細工專門 吉岡房次郎著

●女子技藝撮み細工全書 實物大形紙付 和裝菊判美製 全壹冊 郵税金拾貳錢 正價金壹圓參拾錢

●吾國撮み細工普及に最大効勞者たる著者は啻に學校に於て教授するを以て滿足せず是れを書に上梓して愈々普及を全ふせんが爲めに著せる苦心の書なれば其説明獨習者に遺憾なからしむ

津田敏子著

●ろざし圖案集 說明附 色刷臺紙張製 菊倍判帙入 全壹冊 郵税金拾八錢 正價金貳圓

●著者は閨秀美術畫家にして又熱心なる手藝研究の才媛なり本書は多年研究せる應用最も廣き精巧品を選び袋物より帶模樣に至る迄三餘の新意匠を原色にて現せり別にろざし法説ける冊子を添へたり

共立女子職業學校教師 木村淡香著

●刺繍圖按集第一 附配色法 菊判倍横綴 色摺口繪入 紙數三十五葉 全壹冊 郵税金四錢 正價金八拾五錢

●本書は薄き透明紙に印刷しあれば裏から白粉にて印せば直ちに用布に寫し取れ且つ一般刺繍家の右向左向自由に變更し得る便有り圖樣の刺繍數科書として學生諸姉が所持すれば一齊に下圖の供給が出來る樣に一々原型圖と挿圖とで解り易く説く、針差、小袋、肱突、涎掛、手提袋、帽子、紹刺法、ネクタイ、帽子、

共立女子職業學校教師 木村淡香著

●刺繍圖按集第二 附刺繍術 菊判倍横綴 色摺口繪入 紙數三十五葉 全壹冊 郵税金四錢 正價金八拾五錢

出來時間の節約と寫損の憂なく、成績の進捗數倍に至るべし各冊とも其應用品目は小形額面、半襟、袱紗、裾模樣、手提袋、帶、紙入、ネクタイ、編蝙傘、替紋、クツシヨン、其他一切の小形工藝圖按に渉り各卷共一千以上の圖按數を網羅し各特徴を有すれば何れを使用するも圖按の種類に欠くる事無し摘細工、切紙細工、紋染圖按、圖畫、挿繪、バテンレース等に適用し得

共立女子職業學校教師 木村淡香著

●刺繍圖按集第三 附應用法説明 菊判倍横綴 色摺口繪入 紙數三十五葉 全壹冊 郵税金四錢 正價金八拾五錢

—(大倉書店發行)—

女子高等師範學校講師 森本義子著

●家庭編物全書 和裝菊判 美製 全壹冊 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金拾錢

●編物製作上の必要事項から實用向きの手袋、靴下、襟巾、頭巾、着衣、手提袋、等其他各種の編方を教へ保存、洗濯、廢絲利用方及ぶ全五十章各節に亘り挿圖と相俟て說明懇切なり

共立女子職業學校講師 木村淡香著

●編物圖按集 天之卷 四六判横綴 石版刷 全壹冊 正價金壹圓 郵稅金四錢

●圖畫家として且つ圖按家として名ある著者が女子技藝にも造詣深く自ら適切なる手引を與へんが爲めに考按せる圖按なり、正確なる割線の區劃に從ひて行はば容易に其圖樣の如くに製作し得べきのみならず原圖より擴大又は縮少をなすべき場合は糸の太線と目盛增減とに依りて之を自由になし得べし、天地人三卷に別ち各卷頭に詳細なる說明を加へ各の三十葉の鮮明なる原色刷圖按と圖按應用紙五葉を添へたり。

共立女子職業學校講師 木村淡香著

●編物圖按集 地之卷 四六判横綴 石版刷 全壹冊 正價金壹圓 郵稅金四錢

普通編物の外カンバス採編、織物、紹刺、南京玉綴附、毛出結、玉出結等に應用し得べし

共立女子職業學校講師 木村淡香著

●編物圖按集 人之卷 四六判横綴 石版刷 全壹冊 正價金壹圓 郵稅金四錢

●本書は吾國古來より發達し來れる儀式其他に用ゆる包物、折物、水引及紐結び方等を悉く蒐輯し以て結び方ばなれば何も一々圖解を以て示したる一見直に會得すべし一般家庭に一本を藏して重寶也

前東京美術學校教授文學博士 小杉榲邨校閲 齋藤圓子編

●女子教科 包結之栞 和裝美製 全二冊 正價金壹圓五拾錢 郵稅金拾錢

寺西綠子著

●女子手藝 九重編造花法 和裝菊判 美製 全二冊 各正價金七拾五錢 郵稅各金拾錢

●本書は著者の新工風に係り從來の編物の花弁花とする獨特の技也本冊五種の花弁其形態葉蕊花蕚等の總て眞に作品に著せり外に染色標本及組立圖譜を挿入せり

共立女子職業學校教授 金子支江子 三好幸子 石川壽美子著 前編・後編

●家庭 造花術全書 上・下 和裝菊判 美製 全二冊 各正價金壹圓五拾錢 郵稅各金拾貳錢

●獨習者教授及實驗上より學生及家庭に於て懇切に適する樣豐富なる說明圖を挿入し卷春夏三十七種下卷秋三十八種に付き精巧なる各原色刷石版繪挿入して懇切に解說せり

—(大倉書店發行)—

共立女子職業學校教師 木村淡香著

●花卉圖畫帖 第一卷・第二卷・第三卷 四六倍判 横綴 全三冊 各正價金四拾錢 郵稅各金四錢

●本書は描畫法上最も必要なる毛筆畫鉛筆畫兩樣を示し且つ四凸遠近濃淡調和したる著色優美の花卉圖畫帖にして一切の圖畫の要素を習得するに足るものなれども主として造花科の習畫帖に最適なり

共立女子職業、女子美術、實踐女學校教師 伊澤峯子著

●改訂實用 小兒洋服裁縫全書 洋製菊判 全壹冊 正價金壹圓八拾錢 郵稅金拾貳錢

●著者曾て厳米に學び歸朝後各女學校に於て教授すること多年其實驗に基き一般に最も理解容易なる樣女兒及男兒の服裝方及必要事項を一切其他掛帽子等に至る迄其經解を前掛說せり

共立女子職業、女子美術、實踐女學校教師 伊澤峯子著

●小兒實用 和洋裁縫小物集 洋裝菊判 全壹冊 正價金壹圓 郵稅金六錢

●小兒の精神發達上稚益大なる端正の姿態を保たしむる爲めに必要なる種々の小物裁縫を各家庭の主婦令嬢に容易に習得出來る樣解說したる書である、帽子、前掛、男女兒服、運動服以下各種

女子高等師範助教授並に高等女學校講師 神田順子著

●裁縫新教授書 上卷 和裝菊判 全壹冊 正價金壹圓拾錢 郵稅金拾貳錢

●斯界に名あり且つ文部省檢定委員たる著者が、女子師範、高等女學校、技藝學校等の教科並に參考用等に充つる目的にて編纂せる書也、內容は總論、單衣、半襦袢、單衣、拾長襦袢、拾、綿入、長衣、補綴法等

女子手藝普及會編

●新手藝研究 洋裝菊判 全三冊 正價各金參拾錢 郵稅各金四錢

●女子藝の發達普及の爲め朝野著名の專門諸先生の執筆の下に發行せる研究なり內容は掛額、模樣探索、繡法、學校服、肱突、手提袋、赤兒帽子、以下各種、意匠考按、厳米流行紹介、雜門、以下各種、附錄等

東京女子高等師範講師 高橋岩次郎校訂 女子美術學校講師 富田鄰夫著

●家庭實用 染色工藝 洋裝菊判 全壹冊 正價金壹圓七拾錢 郵稅金拾貳錢

●內容は總論、纖維、水、藥品、精練、漂白、脫色、無地、染、色、揚、目引、染、替、絞り染、引染、糊防染、糊抜染、霧染、捺染、汚點抜、洗濯、染料配合法、洗濯、簡易で家庭の人々が一讀實行容易の書也

慰日庵中澤十夢著

●茶道講義 和裝菊判 美製 全壹冊 正價金壹圓參拾錢 郵稅金拾錢

●本書は初學の人にも解し易きを旨として茶道の由來必要なる事項、茶の湯の主手前仕樣は初習より五種の傳授事及懷石賓主心得七事に至る圖解を挿入して詳述せり外に茶の湯問答八十ケ條を附せり

—(大倉書店發行)—

古流松星派 家元松星齋 中澤理水著

◉古流生花講義 和裝半紙本美製二冊 正價金壹圓七拾錢 郵稅金拾貳錢

●本書は講義と圖譜の二冊本にて前者は生花の歷史及び生花の心得一切、各種草花の生方並に容易に發表せざりし奥儀に至る迄圖を挿入して百二十餘項に亘り平易に述ぶ、後者は八十餘の鮮明なる花生圖譜也

清芳流 鈴木霞外著

◉投入花盛花圖譜 洋裝四六倍判横綴全壹冊 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢

●本書は現今上流家庭に流行しつゝある投入花盛花の圖譜百二十圖なる鮮明なる石版刷とせるものにて卷初には花型、寫眞を木の取合、花器と花卉の取合、挿し方其他必要事項を說明せり

赤堀峯吉 赤堀菊子 赤堀道子共著

◉家庭日本料理法 洋本三六判布製美裝箱入全壹冊 正價金壹圓六拾錢 郵稅金拾錢

●斯界に名名ある著者が各種合せて六百に亘り豐富なる圖解と共に一見直に調理會得し得る樣詳述せり、外に四季獻立、法を醬油及酢の調製法、部類及いろは牽引を附す、家庭及び割烹生の座右の寶典也

赤堀峯吉 赤堀菊子 赤堀道子共著

◉家庭日用料理 上・下 洋裝菊判製全二冊 各正價金壹圓 郵稅各金拾錢

●本書は二十六種の獻立料理法を著者數場にて多年教授しつゝ實驗したる基として著したれば分量等は正確に圖を挿入し懇切に說きたり附錄に和洋惣菜料理有り、五十音牽引も附したり

赤堀峯吉 赤堀菊子共著

◉家庭十二ケ月料理法 上・下 和裝菊判製美全二冊 各正價金壹圓 郵稅各金拾錢

●斯界の大家たる著者が普通一般の料理法は勿論總菜料理、懷石料理、儀式的獻立、節句料理に至る迄自四季十二ケ月に分ち家庭實地試み得る樣詳說し加之に心得べき重要項を數多說明せり

總井まき子著

◉臺所の設計 及簡易日本料理 和裝菊判製美全壹冊 正價金五拾五錢 郵稅金拾錢

●臺所の設計の巧拙は家庭の便不便を來す事大なるのみならず時間の經濟にも大なる影響あり此點は寧ろ技師より經驗ある者考案による方可也著者は多年の經驗是等の設計法を說述し併て簡易日本料理詳述せり

赤堀峯吉・赤堀峯吉共著

◉日本料理教科書 上・中・下 洋、裝菊判全三冊 正價金壹圓四拾錢 郵稅金拾八錢

●赤堀翁は日本料理教授法の區區たる缺點を補し卒先教授上の一大定の規準繩を定め自ら統一を示さんため一あらしめて習ふものをして一目瞭然たらしむる樣編纂せるは本教科書なり

—(大倉書店發行)—

石井泰次郎著

◉野菜料理 洋裝三六判全壹冊 正價金五拾錢 郵稅金四錢

●本書は日常の野菜料理（百三十種）を根菜、葉菜、果瓜、花擬、莖菜、球菜に分ち挿畫を加へて說明し最も手輕に出來る樣に敎へたものである、いろは牽引も附してあり家庭の人には至極重寶なり

赤堀峯吉 赤堀菊子共著

◉即席惣菜料理 洋裝三六判全壹冊 正價金五拾錢 郵稅金四錢

●本書は最も家庭に必要なる日用惣菜の調理法で庖丁の持方及喰ひ味の加減を讓らぬ人々で好手引である材料は何處の土地でも買求めらゝ物を以て記述してあるから實習者には便利である

奥村繁次郎著

◉野菜・果物・魚介諸國漬物法 洋裝三六判布製全壹冊 正價金壹圓參拾錢 郵稅金拾錢

●本書は日常缺く可からざる香の物、酒家の珍重する蔬菜、果物、魚介等の全國特長の漬方法二百數十種に亘り詳說したるもなれば娛樂營業の論なく家庭の厨房に一本備ふべき良書也

宇野彌太郎著

◉西洋料理法大全 洋裝菊判布製箱入全壹冊紙數八百餘 正價金參圓五拾錢 郵稅金貳拾四錢

●著者四十四年の研鑽並に歐米各地に到り其特色を研究し我國の西洋料理に從事する人々の爲に最新料理獻立壹千餘種及必要なる要項を網羅收集し圖解を加へて詳細に叙したる料理界の大寶典也

日本女子大學校講師 赤堀峯吉著

◉家庭實用西洋料理法 洋本三六判布製美裝箱入全壹冊 正價金壹圓六拾錢 郵稅金拾錢

●日本料理界に名名ある著者曾て歐米に遊び研究し歸朝後各女學校に敎授すること多年襲に日本料理法を著し又西洋料理法幾百種を豐富なる挿圖と共に懇切に說き遂に新著也女學生、家庭の割烹の典也

宇野彌太郎、渡邊謙吉共著

◉家庭西洋料理 洋裝菊判布製全壹冊 正價金壹圓參拾錢 郵稅金拾錢

●著者は歐米各國の料理に通ぜる大家なり我が國家庭に適する樣其嗜好及趣味と實益を按排し三百三十餘項を餘して最も平易に說明し夫人令孃方厨房の參考とせり發行以來版を重ること多大也

大森阿仁子、川島芳子共著

◉西洋料理 附作法と心得 洋裝菊判布製全壹冊 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢

●本書は食卓の準備、食事の作法、食物、臺所、食物の調理法、各種食物の供し方、場合に應じた作法、客の待遇法、食事、社交機會に付き詳細に述べてある、本書を見れば外人の接待法が容易に解る

11
296

—(大倉書店發行)—

未苔庵 梅田嬌菓著
●家庭 **和洋菓子製法** 洋布裝三六判製 全壹冊 定價金壹圓貳拾錢 郵稅金拾錢

●眞和洋 **菓子製造法** 未苔庵 梅田嬌菓著 洋布裝三六判製 全壹冊 定價金壹圓貳拾錢 郵稅金拾錢

●菓子業として將又斯道研究に苦心すること多年漸く實驗上確乎不動の和洋菓子製造法を集めて菓子界眞正の秘密を公にせるもなれば斯道業者の明星也又一般甘黨家の好き手引なり

●祖先以來の菓子業家に生れ研究其蘊奥を究め殊に斯道開發に熱心なる者ぶ家庭の爲に實際的の新菓製法百五十種を平易に述ぶ果實菓子、蒸菓子、揚物菓子、應用菓、燒菓子、煎餅菓、生砂糖菓に分類す

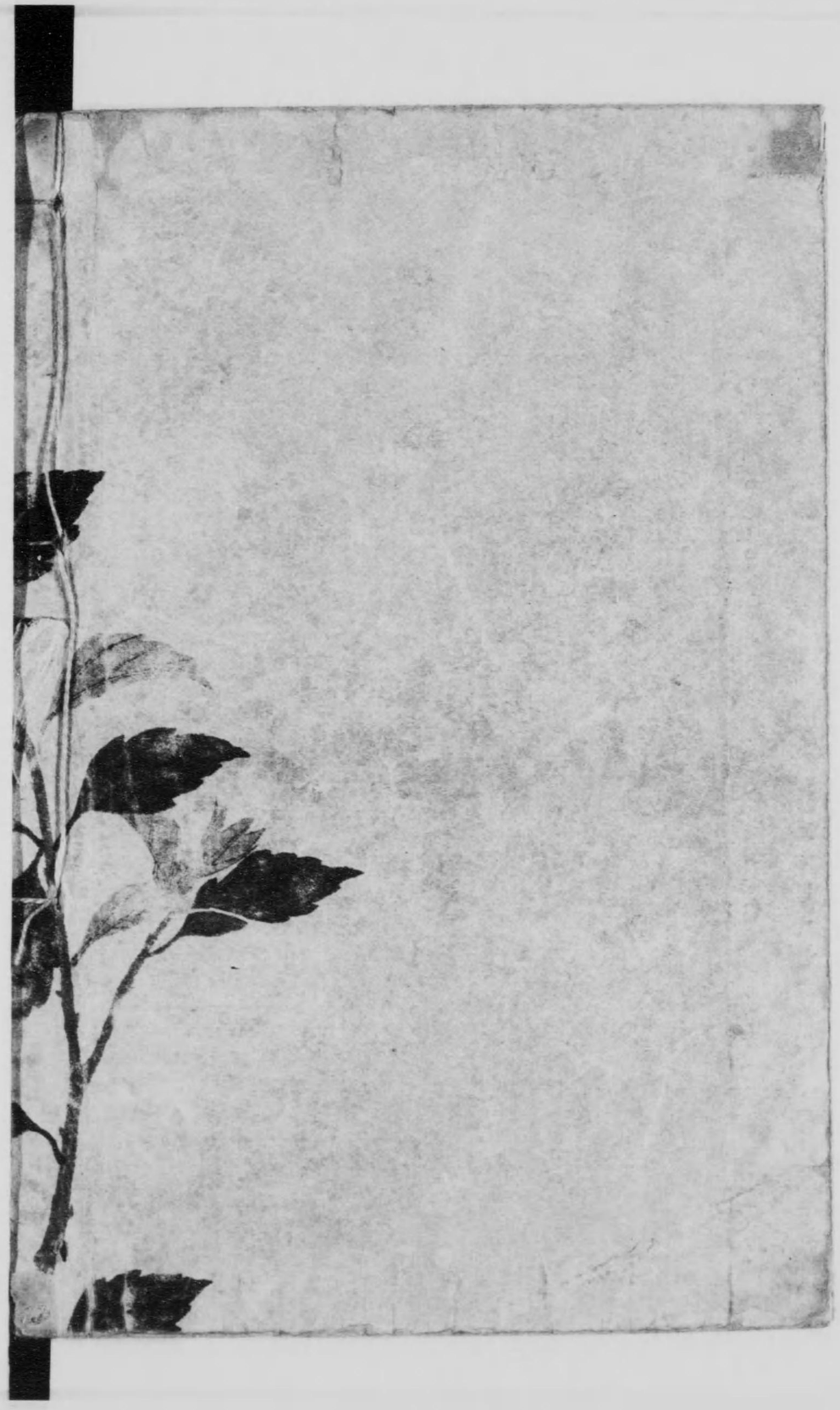
女子美術學校講師 富田輝夫著
●**紋り染圖案集** 第一 附說明書 實物大圖按甘六葉口繪現色刷四葉 定價金壹圓參拾錢 郵稅金拾貳錢

●本集は著者が從來實際に用ひたる各種の圖按を一般家庭、女學校、普通染色業者の實用に供せんが爲め努めて工業上の件を缺かざらん事を期し全體を實物大と爲し且要用上途の分類、加工法、色彩等の說明を添ふ。

女子美術學校講師 富田輝夫著
●**紋り染圖按集** 第二 近刊

女子美術學校講師 富田輝夫著
●**紋り染圖按集** 第三 近刊

●**新編裁縫全書** 近刊

●バザー用 **袋物新書** 近刊

終